に、吾々は今のところ世界に誇るべき何物をも持つて居ないのである。されば吾々が世界の思想界に寄與するなどゝ云つても、何か一種の空想に過ぎぬやうに思ふ人の多いのも決して無理ではない。しかし小亞細亞の一隅にあつた猶太といふ小國から出た基督敎が、久しく歐羅巴全體の思想を支配して居たではないか。耶蘇が其の敎へを唱へ始めた時、その國は小國であつたのみならず、羅馬帝國の權勢の下に屈して奴隷の境界に沈んで居たのである。此の微弱なる國民の間から出た、耶蘇といふ一靑年が此の地上の凡ての者を救ふと號して新しい敎へを唱へ始めた時、其の敎へが唯一國の中にだけでも流布しやうと思つた者は無かつたであらう。然るに三百餘年の後には其の敎へが羅馬帝國の國敎として公認せられ、一千年の後には其の敎へを代表する羅馬法王は、帝王に履を取らせる程の權勢を有するに至つた。是は決して偶然の事でない。古來から歐羅巴に傳はつた敎への中で基督敎に匹敵すべきだけの價値あるものが一も無かつたからである。たとへ盛衰消長の運に變遷はあらうとも、最も優れたものが最後の勝を制すべきは定まつたる理である。眼前の榮枯のみを見て、妄りに千年の後を臆斷してはならぬ。

吾が邦は往昔の猶太のやうに微弱な國では無い。たとへ歐羅巴の諸國から學ぶ所が多く、また今後も學ばなければならぬ事が多いといつても、その頃の猶太と羅馬帝國との關係と比ぶべきものでは無い。日蓮上人の立宗以後、入滅までの三十年は耶蘇の敎へを弘めた歲月の凡そ十倍である。上人は耶蘇の如く磔にされて死にはしなかつたが、其の生涯に多くの難に逢はれたことは彼の比では無い。されば耶蘇敎の歐羅巴に傳はつた當時の事情と、現在に於ける日蓮主義の周圍の事情と比べて、決して彼よりも劣るといふことは無い。彼の如き事情に在つた敎へでも、其の實質に於て他の多くの敎へよりも優れて居れば、最後の勝利を得たのである。今日蓮上人の敎義に就て考へても、それが實質に於

て彼の基督教よりも、また佛教中の多くの宗派の教へよりも優れて居るならば廣宣流布の希望の達せられぬといふ理はない。要は其の實質如何に在ることである。

流布の中心たるべき國

しかしながら是は理想である、現在の有樣が此の理想に對して甚しき距離をもつて居ることは、余が改めていふまでも無い。內に滿ちずして外に溢れることは出來ぬ、世界にその力の及ぶのを望む前に、まづ自己の國を匡さなければならぬ。彼の基督教の勢力が歐洲に及ぶ時、猶太人は已に亡國の民であつた。佛教も其の支那に於て大發展を遂げた時には、其の發生の地たる印度は衰頽に陷つて居た。宗教は人類全體の爲に存するものであるから、或る一二の國の運命が如何なつてもそれは問ふ所で無いといふ說もあるが、日蓮上人の主張は決してさういふものでは無い。上人は常に『日本乃至一閻浮提』といひ、日本が先づ法華經の國となり、然る後此の日本を中心として世界に及ぶべしと主張せられたのである。たとへ其の教へが如何に貴い教へであつても、國民に之を持つだけの力がなければ、教へはこゝを去つて他に流布するのであるが（印度の如き正しくそれである）日本國民には法華經流布の中心たるべき天分が具はつて居ると、上人は確信して居られたのである。

法華經と日本國

「彌勒菩薩の瑜伽論に云く、東方に小國有り、其中唯だ大乘の種姓のみ有り云々。……肇公の翻經の記に云く、大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩て授與して云く、佛日西に入て遺耀將に東に及ばんとす。此の經典は東北に緣有り、汝愼んで傳弘せよ云々。予此の記文を拜見して、兩眼瀧の如く一身悅びを徧くす。此の經典は東北に緣有り云々。西天の月支國は未申の方、東方の日本國は丑寅の方なり。天竺に於て東北に緣有りとは豈に日本國に非ずや。――曾谷入道殿許御書

と記された如きは其の一例である。須梨耶蘇摩とは羅什が印度に遊學中に教へ

流布の順序

を受けた人、肇公とは羅什の弟子僧肇のことである。

娑婆卽寂光土を理想とする法華經の敎へは、徒に高遠な理想をのみ說くものでは無く、其の敎への弘まる所に一歩一歩と其の效果を現はし來るべきものである。されば其の世界に弘まるに當つても、健實に其の歩を進めて行かなければならぬのは勿論である。而して其の流布の中心たるべき國は、吾が日本の如き最勝の國でなければならぬ。此の國の上下萬民盡くが此の最勝の經を信ずることに依て、各その心に偉大なる力を具へ、各奮つて其の事に當るやうになれば、國の實力は必ず充實し、外に對しても必ずや目覺しい發展をするに違ひない。其の國力の發展に伴つて此の敎へが次第に世界に流布する時、所謂『一天四海皆歸妙法』の豫言が、はじめて事實となつて現はれて來べきである。日蓮上人が

我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等とち

如說修行の人

かひし願やぶるべからず。――開目鈔

と申されたのは、やがて世界の柱となり、眼目となり、大船となるべき理想を其の胸に懷いての事と思はれる。

斯る貴い天職をもつて居る日本國民が、更に之を自覺せずして、いつ迄も誤つた生活を續けて行くのを見ては、上人たるもの如何にしても之を傍觀することの出來やう筈はない。其の激烈を極めた折伏の聲は、畢竟此の國を愛し此の民を愛する至情より出たものである。是れ實に法華經の行者として當に取るべき態度で、卽ち『如說修行の人』と自ら許されたる所以である。而して上人の解釋によれば、其の當時に頻々として起つた天變地天も、數度の內亂も、蒙古の來襲も盡く日本國の上下萬人を警醒せんが爲のものであつたのである。卽ち佛天は日本國を警醒すべく、日蓮上人と力を協せて、此等の有らゆる災害を下したわけである。斯くして國が滅亡にまで瀕して、國民がやうやく覺醒して來

蒙古來襲と日蓮上人

れば、新なる曙光がこゝに輝き始むべきである。上人は蒙古の來襲に就て

此國既に梵釋日月四大天王等の諸天にも捨てられ、守護の諸大善神も還て大怨敵となり、法華經守護の梵帝等、隣國の聖人に仰せ付けて日本國を治罰し佛前の誓狀を遂げんと思しめす事あり　――下山御消息

といふ類のことを屢々くりかへして居られるが、是は一應の所では當時の日本國に對する咒詛の語に聞えるけれども、深く之を味へば實に日本國の將來に關する祝福の聲なのである。全く望みの無いものには、罰の與へられる筈も無い。蒙古の來襲を此の國に對して與へらるゝ罰と解すのは、卽ち之に依て罪を償つて後に、新に覺醒したる時代の來べきことを信じたるが故である。されば愈々蒙古の大擧して來襲したことを聞いて後、上人の弟子檀那等に與へられた御書には、其の以前とは全く語氣が改まつて、

小蒙古の人大日本國に寄せ來るの事、我が門弟並に檀那等の中に、若し他人に向ひ將た又自ら言語に及ぶべからず。若し此旨に違背せば門弟を離す可き等の由存知する所也。此旨を以て人々に示すべく候也。――小蒙古御書

今後の國難

とある。法華經流布の中心たるべき機運が既に此國に動いたと見究めたればこそ、特に此國を呼んで大日本國といひ、其の弟子檀那等に對して輕々しく上人の豫言が適中したと云つて人に對つて誇稱することを止められたのであらう。斯る大國難を却て此國に對して與へらるゝ警告と解して、前途を樂觀するといふことは、上人ならでは出來難い事である。

今後に於て世界各國より吾に對して加へらるゝ壓迫は、蒙古來襲の如き一時的のもので無く、眞に吾々日本人が大國民たる素質を有するか否かを驗すべき空前の機會といはなければならぬ。吾々が正しい信仰の上に立つて、勇猛精進以て有らゆる艱難を排し去り、永遠の發展を遂ぐべき一切の基礎を此の機會に於て確立することが出來たなら、日蓮上人の精神がこゝに初めて遺憾なく復活

吾々の責務

せられたものといふべきであらう。その機會は現に目前に迫つて居る。維新以來打續いたる社會の變動によつて、數ふるに堪へぬほどの弊害が重り來つては居るが、余は決して世間が腐敗し盡したとは信ぜぬ。吾々の祖先を辱め、日蓮上人の豫言を空にし、法華經流布の中心たるべき大任を拋つてしまふやうな腑甲斐ない國民になりきつたとは如何しても信じられぬ。しかしながら今日に於て此の新なる機運を作るのには、非常な努力を積まなければならぬこと勿論である。今までのやうな緩み切つた了簡では到底いかぬ。近頃では『時勢が此處まで切迫して來たら、大英傑が現はれて國民を指導しさうなものだ』といふやうな希望を懷く人も往々にしてあるやうである。しかし英傑は天からも降らず地からも湧かぬ。左樣に頼みにならぬ頼みをかけて居る暇に、吾々自身の努力を積んだ方が優つて居る。吾々は愚痴未練の凡夫であるが、一の貴い信仰の下に集まつて、吾々の力を協せたならば、こゝに偉大なる佛陀の力の光りが宿つて世の闇を照すやうな働きも決して出來難いことはあるまい。幸に吾々と同じ此の國土に日蓮上人といふ偉人が出現して、法華經によつて現はされた佛陀の靈力を其の身に感得し、活きた信仰の模範を其の行ひと其の言舌文章によつて吾々に示された。吾々は今より奮ひ起つて、其の歩まれた跡を追はなければならぬ。

上人の著述

上人は六百三十六年のむかし入滅せられたが、その遺された敎への中には上人の魂が籠つてゐる。殊に其の心血を濺いで認められた多くの著述は、漏れなく今に傳はつて居る。其の總數四百餘篇の中に眞僞の疑はしいものも多少交つては居るが、其の大部分は確かに信憑すべきもので、其の眞筆の今に存するものさへ少く無い。上人の著作は普通一般の著作とは全く類を異にするもので、其の忽卒の際に筆を下されたものでも、其の心に信じ身に行ふ所をその儘に文字に寫されたのであるから、其の一字一句の間にも上人の人物性行が躍如とし

て現はれて居る。されば吾々が誠心を籠めて之を讀む時には、之によつて上人の教義の如何なるものなるかを了解し得るのみならず、吾々の心に偉大なる感化を受けることが出來る。上人の貴い人格の光りが吾々の心を照す時、吾々は髣髴として其人を眼前に見、親しく其の教へを受けて居るやうに感ずる。上人と吾々との間に六百數十年の隔たりがあることを殆んど忘れてしまふ。

書によつて吾人が日々の行路の上に播かるゝ慶福は、貴重なること世に比すべきもの無し。吾人は書に對する時、恍として最も莊嚴に且光輝ある天地を、最も高尚なる人々と相携へて逍遙するが如くに感ず。——ホイツプル

といふは、此の如き文字に對してのみ適當する語である。宗教上の事を何も知らぬ人が遽かに上人の遺文を開いて見ても、その意味の半分は了解し得られぬであらうが、それでも決して後悔は無い。其の言語文字の中に宿つてゐる上人の人格の光りは、讀む人の心を照さずしては止まぬ。たとへ其の中に理解し難いことが多くあらうとも、熱心に之を讀む人の心には、必ず強い感化が與へられ、實に『最も莊嚴に且光輝ある天地』に逍遙するの感を起すに違ひないことである。殊に余は今の世の青年諸子が上人の教義を研究せらるゝことを熱望する者であるが、そこ迄の熱心の無い人でもせめては上人の文章に親んで、其の偉大なる人格の感化を受けらるゝことを、余は切に希望して止まぬ。

その人格の感化

遺文の種類

一六　日蓮上人の遺文

日蓮上人の遺文として今に傳はるものゝ中には、數千言を陳ねた長篇もあり僅に二三行に足らぬ短文もある。而して其の最も短いもの、例へば池上宗長に身延から與へられた御消息、

〻青鳧五貫文送給了。奉〻唱南無妙法蓮華經一返事。恐々。

六月十八日　　日蓮

といふ如き僅に二十字許の間にも、上人の面目はまことによく現はれて居る。

又其の文の性質によつて別てば、例へば上人自ら

去年の十一月より勸へたる開目鈔と申す文二卷造りたり。頭切らるゝならば日蓮が不思議とゞめんと思ひて勸へたり。――種々御振舞御書

と稱せられた開目鈔。または

佛滅後二千二百二十餘年未だ此書の心有らず、國難を顧みず、五五百歳を期して之を演說す。――觀心本尊鈔副狀

と自ら稱せられた本尊鈔。その他立正安國論、撰時鈔等の如くに、自ら一部の著作として筆を執られたものもある。又弟子檀那等に與へられた御消息文は御遺文中の過半を占めて居るが、其の中にも教義上の問題などに就て縱横に論議を盡されたもの、例へば曾谷入道許御書、兄弟鈔の如きは、其の內容から見ても、又その力を用ゐられた點から云つても、一篇の著述と見做すべきものである。又諸法實相鈔の如く、さまで長くも無い御消息文でも、其の實質に於て一大著作たるものも少く無い。又諸經の文や論釋等の文を抄錄せられたものもある。例へば傳敎大師の著なる『法華秀句』を抄錄したる、秀句十勝鈔の如きはそれである。

其の文體には漢文と和文とあるが、勿論和文の方が遙かに立勝つて居る。漢文も東鑑や明月記の如き文とは異つて、堂々たる漢文の體を爲したものではあるが、決して其の妙を極めたものとはいはれぬ。和文は古代の物語文の如くに優雅なものでも無く、又中古の軍記文の如き音樂的のものでも無いが、氣魂精神の充ち溢れた、神品とも稱すべきものである。固より文字章句に彫琢を加へられた迹も見えぬが、其の一句一語の底にも張りつめた力は、讀む者の胸臆に徹せざれば止まぬ趣がある。元來奈良平安の朝以來支那文明の模倣を專にして來た中にも、學問文藝の方面に於ては殊に唐朝に於ての發達が前後に比無き程

の目覺しいものであつた爲、日本から行つた留學生などはたゞ眼が眩んでしまつた樣な狀態であつた。されば何にでも重要なものは盡く漢文を用ゐるといふ習はしになつて、朝廷に於て撰述せらるゝ歷史をはじめ、政治上、宗敎上の重要な文書著作は盡く漢文であつた。和文で書いたものは皆婦人の手になつた者のみで、貫之の土佐日記なども態々婦人の書いた體にしてある。されば和文として代表的の作は、盡く婦人の手に成つたもので而も其の婦人といふも、宮廷の中で型にはまつた生活をして居た婦人だけである。斯樣な作を日本文の代表的なものとして擧げるのは如何にも心細い次第であるが、他に然るべきものが無いから、據なく名文といへばいつでも源氏物語、枕草子と極つて居る。さういふものを標準にして日蓮上人の文を品隲することは出來ぬ。

他國の語を用ゐて作つた文は如何に優れたものでも、要するに模擬文として上乘のものたるに過ぎぬ。自由に自己の思想をいひ現はさうとすれば、是非とも自國の語を用ゐなければならぬ。また實際感情が高潮に達して來れば、模擬的の文などを假らずに、自由なる自己の語によつて其の感じを現はさずには居られぬ筈である。久しく漢文にのみ限られて居た宗敎上の著述の中にも、鎌倉時代に入るに及んで漸く和文のものが交つて來たのは自然の勢である。卽ち是は宗敎が一般の人心の要求に應ずべき、切實眞贊なものになつて來たことを證據立てるものとして注意すべきである。法然上人や親鸞上人が平易な和文を以て深遠な敎理を述ぶることを試みたのは、敎育の程度の低いものにも通ずるやうにといふ用意のみでは無く、其の內容に應ずべき自然の形を擇んだものと考へられる。日蓮上人の出らるゝに及んでは、其の敎義に於てのみならず、其の文に於ても別に一生面を開き、中古文學中に一異彩を放つた。

殆んど時を同うして世に出た親鸞、日蓮の二上人は（前者の立宗は後者の立宗に先つこと二十九年、前者の示寂は後者の入滅に先つこと二十年である。）

其の教義に於て各その特色を發揮するのみならず、其の文に於ても著しい對照を示して居る。親鸞上人は京都で生れて、堂上家の奥向きで育つた。日蓮上人は安房の海邊で生れて太平洋の荒濤の音を聞きながら人となつた。彌陀の慈悲にたより、一切の思慮分別をすてゝ、來世の成佛を期せよと敎へるものは親鸞上人である。釋尊の大恩に報ずる爲に、身命を惜まずして奮鬪し、此の世を寂光淨土に化せよと敎へるものは日蓮上人である。彼は自ら下して愚痴の凡夫とし、此は自ら期する所上行菩薩の再誕たるに在る。『念佛はまことに淨土に生るゝ種にてやはんべるらん、または地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候』といふ如き親鸞上人の態度と日蓮上人が、四條金吾に對して

たとひ殿の罪深くして地獄に入り給はゞ、日蓮をいかに佛になれと釋迦佛こ

しらへさせ給ふとも、用ひまゐらせ候べからず、同じく地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入るならば、釋迦佛法華經も地獄にこそは在しますらめ。暗に月の入るが如く、湯に水を入るゝ如く、氷に火をたくが如く、日輪に暗をなぐるが如くこそ候はんずれ。――崇峻天皇事

と示されたる如き態度とは、根本的に異るものである。されば其の筆にあらはれた所も非常に趣を異にして居る。一方は婉曲であり、一方は直截である。一方は能く整つて居る、一方は力に充ちてゐる。彼は賀茂川の水の流れて霞の中に入るが如く、此は富士の峯の高く天際に聳ゆるが如くである。彼は野に匂ふ花の如く、此は空に輝く星の如くである。彼は女性的であり、此は男性的である。彼は訝ふるが如く又慰むるが如くである。此は常に敎訓し鼓舞し激勵して止まぬ。彼には不透明な語も少くないが、此は一言一句明々白々たらざるものは無い。讀む者をして宛ら朧月夜にそゞろ歩きするやうに感ぜしむるものは親

日蓮上人の筆蹟

鸞上人の文である。青天白日の下を悠々と濶歩する如き感を起さしむるものは日蓮上人の文である。

日蓮上人の文を讀むものは、『文は氣を以て主と爲し、氣は誠を以て主と爲す』といふ古語の虛ならぬを知るべきである。『たゞ妙法蓮華經の五字七字を、日本國の一切衆生の口に入れんと勵むばかり』といふ洪大なる慈悲心が發して文章となつたればこそ、其の文に斯の如き力があるのである。また其の種々なる苦難にあふ毎に、法華經弘通の大任を果し得る身の悅びを感ぜらるゝこと益々深き故に、其の筆に發せらるゝ所には自ら陸離たる光彩が生じて來る。決して他人の學んで能くすべき所では無い。御書の中で其の眞筆の今に存するものも少く無いが、何れもまことに美事なものである。上人の筆蹟は上人の文章と同じく、力に充ち光りに充ちたもので、能く上人の人物を現はして遺憾なく、眞に天下の至寶である。之を弘法大師の筆と竝べて、僧侶中で一對の名筆と稱する

者もあるが、彼は學んで其の妙に至つたもの、此は其の人物の發露したもので、天籟と人籟との別がある。下總中山の法華經寺は上人の眞蹟を所藏すること、全國に其の比を見ぬ所であるが、伊豆玉澤の妙法華寺、富士の大石寺その他にも眞蹟の藏せらるゝものは少からずある。富士北山本門寺に藏せらるゝ貞觀政要の鈔錄の如きも、稀世の重寶と稱すべきものである。

上人の遺文の初めて集められたのは、其の入滅の翌年卽ち弘安六年のことで、是は都合百四十八篇で四十卷に分たれた。其後入滅の三周忌から着手して集めたものが二百五十九篇、二十五卷に分たれてある。前者は錄內と稱せられ、後者は錄外と稱せられる。其他にも本滿寺御書と稱せらるゝ二十卷、他受用御書と稱せらるゝ八卷、三寶寺御書と稱せらるゝ二十二卷、御書續集三卷、妙蓮寺御書一卷等があるが、何れも寫し傳へられたものである。版本が出來たのは、元和八年に錄內四十卷の開版になつたのが始めで、これは本圓寺版と稱せらる

るものである。時は上人の入滅後三百四十年に當る。その後錄内は屢々刊行せられたが、錄外の刊行せられたのは、寛文二年に京都の山屋治右衞門の版にしたのが始めである。是は入滅後三百八十年に當る。德川時代の末期に名古屋の人で、玄修日明師といふが遺文全體を編年體に編纂することを企てたが、完成を得なかつた。其の志を繼いだのが卽ち小川泰堂居士で、天保九年から凡そ三十年を費して慶應元年に高祖遺文錄を完成した。其の校訂對照に力を費したのは非常なもので、『あはれたゞ佛もてらせ神も見よこの一卷のこゝろづくしを』といふは其の僞らざる告白である。是は三十卷、三百八十七篇に分れてあるが、其の刊行せられたのは明治十二年のことである。其後明治三十七年に至り日宗新報社から出版した縮刷の御遺文集は、高祖遺文錄以外に、七十九篇を新加し、最も完備したものである。最近に至ては數種の活版本あつて世に行はれて居る。しかし普及の目的を果すには、まだ却々充分とはいはれぬ。

御義口傳と日向記

註法華經

遺文とその年代

上人自身の著作以外に、なほ御義口傳と御講聞書との二書がある。御義口傳は上人が身延に在て御弟子の爲に法華經の要文に就て講ぜられたのを、日興上人が筆錄したもので日興記ともいふ。其の初めて刊行せられたのは、承應三年のことで、上人の入滅後三百七十二年に當る。御講聞書は大體前と同じ目的で再講せられたのを、日向上人が筆錄したもので、また日向記ともいふ。(其の最初の出版の年未詳)以上兩書は上人の著述に準ずべきものである。

なほ此外に註法華經といふものがある。是は日蓮上人が自ら法華經の中に、他の諸經や論釋の中の要文を註記せられたもので、勿論『註法華經』といふは後人の下した名である。其の眞筆は玉澤の妙法華寺と池上の本門寺とに半部づつ藏せられてある。池上の佛乘院日惺師が始めて之を書寫して世に公にしたのを、延寶九年はじめて十卷として刊行した。

此の四百數十篇の遺文は、仁治三年二十一歳にして書かれた『戒體卽身成佛

義』を始めとし、弘安五年入滅前に認められた『波木井殿御報』を終りとし、前後四十年間に成るものである。其中で最後の身延隱栖凡そ八ヶ年半の間に認められたものが最も多數である。佐渡在島は凡そ三ヶ年半であるが、その短い割合には著作の數多く、且重要なものが多く含まれてある。概していへば佐渡配流以前のものよりも、其の以後のものに重要な著が多い。又古來から遺文中に於て立正安國論（文應七年三十九歳）開目鈔（文永九年五十一歳）觀心本尊鈔（文永十年五十二歳）撰時鈔（建治元年五十四歳）報恩鈔（建治二年五十五歳）の五篇を五大部と稱し來つたが、第一のは佐渡配流の十一年前鎌倉に於て、第二と第三のは佐渡に於て、第四と第五のは身延に於て書かれたものである。此はいづれも重要なものには相違ないが、此以外にも重要なものが無いといふ譯では無い。彼の法然上人の『選擇集』とか、親鸞上人の『教行信證』とかいふものは、其の一部を精讀すれば其の教義の大概を知ることが出來る。然るに日蓮上人の遺文には、一部によつて其の教義の大概を窺ひ得べきものが無い。故に志ある人は遺文中に就て遍く對照精讀して其の眞意の在る所を捉へなければならぬ。

今より余が叙述せんとする所は、上人の教義の梗概を知るに必要と思はれることを、古來から傳はつた中から拾ひ出したに過ぎぬものである。勿論其の中には余の臆斷も交るから、果して上人の眞意を誤る恐れが無いか如何か、頗る覺束ない義である。之によつて多少の手掛りを得た人は、自ら進んで上人の遺文に就て忠實に研究しなければならぬ。

一七　教判の五綱

1　教判と宗旨

娑婆卽寂光土の理想を實現せんが爲には、人々が皆菩薩の行を積むことに努めなければならぬ。其の菩薩の行を積むのには、佛の示された所の道に從はな

一乘法

三大秘法

ければならぬ。佛の示された所といふは別の事で無い、

十方佛土の中には、唯だ一乘の法のみ有り、二も無く亦た三も無し。――

方便品

と指し示された所のものである。その一乘の法の神髄が卽ち法華經の本門に於て示されてあることは、天台大師以下諸師の釋する所によつて明である。而して此の一乘の法を末世に流布せよといふ釋尊の命であるが、之を如何なる意味に解し、如何なる形式に於て信じ、如何なる方法によつて持つべきかを、釋尊が一々示されはせぬ。それは末世に出て之を弘める者に遺されたる問題である。之に就て天台大師以下、傳敎大師に至るまで段々究め來つた所を、更に實踐的にして大成せられたものが卽ち日蓮上人の宗旨である。其の宗旨の骨子たるものが三つある、所謂『三大祕法』である。

問て曰く、如來滅後二千餘年に龍樹天親、天台傳敎の殘し給へる所の祕法とは何物ぞや。答へて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。……

敎判の必要

是の如く國土亂れて後、上行等の聖人出現し、本門の三の法門之を建立し、一四天四海一同に妙法蓮華經の廣宣流布疑ひ無からんもの歟。――法華取要鈔

とあるが卽ちこれである。此の廣宣流布の日とは、卽ち一天四海一人も殘らず法華經に歸依する日をいふのである。宗敎は哲學のやうに少數の識者を相手とするものでなく、賢愚に論なく凡ての人を救ふことを目的とするのであるが、識者によつて唱へられずに廣宣流布するといふことは出來ぬ。されば法華經が最勝の經であつて、末世の衆生を救ふには此に限るといふ確信を、まづ識者に與へることを努めなければならぬ。然るに釋尊の一代五十年の說法は非常に多方面のものであつて、何れの經を開いて見ても、是こそ最勝の經であらうと思はれる程に、何れも貴く感じられる。又其後に出た論師人師の著はしたものも極めて浩瀚であり且多岐に分れて居る。此の中に就て法華が果して最勝の經で

あるか否かを分つのは容易の業ではない。是れ則ち天台大師の如き深遠なる學識と、堅固なる信心とを共に具へた人が自ら奮つて教相の判釋に力を用ゐ、後世の指南たらんことを努めた所以である。

若し末世の衆生に相應せぬ教へを弘めて釋尊の本意に背くならば、佛の弟子と稱しながら、佛に對して罪を重ねる次第である。又世に斯る罪を重ねるものの有るを見ながら、之を打棄て置くならば、たとへ自ら之を惑はしたので無くても、自ら之を惑はしたと同樣の罪である。天台大師は勿論、妙樂大師にせよ、傳教大師にせよ、法華經の最勝の經であることを信じた人は、必ず諸經の文を比べ合せ、諸宗の主張を比べ合せて、何れも法華經の中に示された唯一乘の法の下に歸せなければならぬことを明にせんが爲に、その力を盡したもので、是れ佛弟子たる者の身に負うた責であると信じて居たのである。日蓮上人は法華經流布の時と定められた末世に生を享けられたことであるから、此等の諸師に

佛弟子たる者の責

比べて其の責を感ずること一層痛切であつた筈である。乃ち自ら

法華經の第七の卷を見候へば、於二如來滅後一、知二佛所說經因緣及次第一、隨レ義如レ實說。如三日月光明、能除二諸幽冥一、斯人行二世間一、能滅二衆生闇一云々。文の心は此法華經を一字一句も說く人は、必ず一代聖教の淺深と次第とを能く能く辨へたらむ人の說くべき事に候。譬へば曆の三百六十日をかんがへるに、一日も相違せば萬日俱に反逆すべし。三十一文字を連ねたる一句一字も相違せば三十一字共に歌にて有るべからず。謂ゆる一經を讀誦すとも、始め寂滅道場より、終り雙林最後にいたるまで次第と淺深とに迷惑せば、其人は我が身に五逆を作らずして無間地獄に入り、此を歸依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし。——神國王御書

と申された如く、其の自ら深く究めて確信せられた所に基いて一代聖教中に於ける法華經の地位を明にすることに力を用ゐられた。それは天台、傳教等諸師

五綱の名

の研究に負ふ所固より深いが、徒に之を襲踏したのでは無く、上人には上人として獨特の抱負もあり主張もあるのである。上人の立てられた教判の大綱は、凡て五つである。卽ち

行者佛法を弘む用心を明さば、夫れ佛法を弘めんと思はんものは必ず五義を存じて正義をひろむべし。五義とは一には教、二には機、三には時、四には國、五には佛法流布の前後なり。――顯謗法鈔

とあるが如く、此の五綱によつて法華經の最勝なる所以を明にし、然る後に三大祕法に入るのが順序である。上人が此の五綱を立てられたのは、前後殆んど二十年の研究を積まれての上である。

日蓮は安房の國東條の郷清澄山の住人なり、幼少の時より虛空藏菩薩に願を立て云く、日本第一の智者となし給へと云々。――善無畏三藏鈔

とある如く、幼年の頃から非常なる努力を以て諸宗の教義を究め盡された。卽

ち自ら

日蓮は日本國安房國と申す國に生れて候ひしが、民の家より出で頭をそり袈裟をきたり。此度いかにもして佛種をも植ゑ、生死を離るゝ身とならんと思ひて候ひし程に、皆人の願はせ給ふ事なれば、阿彌陀佛をたのみ奉り、幼少より名號を唱へ候ひし程に、いさゝかの事ありて此事を疑ひし故に一の願を起す。日本國に渡れる處の佛經、竝に菩薩の論と人師の釋を習ひ見候はゞや。又倶舍宗、成實宗、律宗、法相宗、三論宗、華嚴宗、眞言宗、法華天台宗と申す宗どもあまた有りと聞く上に、禪宗、淨土宗と申す宗も候なり。此等の宗々、枝葉をば細かに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に、隨分走りまはり、十二十六の年より三十二に至るまで二十餘年が間、鎌倉、京、叡山、園城寺、高野、天王寺等の國々寺々、あらあら習ひ廻り候ひし程に云々――妙法尼御返事

日蓮上人の立場

と記された所に、よく其の委曲を悉してある。釋尊といふ一の源から既に十流にまでも分れて居る。その十流はそれ〴〵に存在の理由があるに違ひ無からうが、釋尊の眞意に合したものは何れか一つでなければならぬ。但しは十流共に釋尊の眞意に合せぬものであるかも知れぬ。いづれにしても此等を統一すべき唯一の本流を見出さなければならぬといふ考へから、上人は斯の如く苦心して其の研究を續けられたのである。されば

日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。持戒破戒にも闕けて無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり。いかにしてか申し初めけん、上行菩薩の出現して弘めさせ給ふべき妙法蓮華經の五字を、先立てねごとの樣に、心にもあらず南無妙法蓮華經と申し初めて候ひし程に唱ふるなり。――妙密上人御消息

とある如く、自ら一宗を開かうといふやうな小い目的の爲に起たれたのでは無く、眞にその頭に『大覺世尊の代らせたまふ』ことを確信するによつて唱へ出されたる南無妙法蓮華經である。

上人の心事

2　日蓮上人以前の佛教――王朝時代

日蓮上人は自ら一宗を開く爲でなく、其の時の要求に應じて已むを得ずして起たれたのである。卽ち自ら世に對して何等の求むる所が無い。これ其の如何なる艱苦にも克ち得たる所以である。其の自ら評して

強敵を伏して始めて力士を知る。惡王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。

例せば日蓮が如し。これ傲れるにはあらず、正法を惜む心の强盛なるべし。おごる者は必ず强敵に値ひて、おそるゝ心出來する也。例せば修羅のおごり帝釋にせめられて、無熱池の蓮の中に小身と成て隱れしが如し。――佐渡御書

と申された如く、たゞ正法の世に流布せぬを惜む誠心一つであればこそ、如何

なる場合にも勇氣を失はぬを得られたのである。眞に『我不レ愛二身命一、但惜二無上道一』とは此の謂である。むかし諸葛孔明は自らその經歷を述べて、

臣は本布衣にして、躬づから南陽に耕ず。苟も生命を亂世に全うし、聞達を諸侯に求めず。先帝臣が卑鄙を以てせず、猥りに枉屈して三たび臣を草廬の中に顧み、臣に諮るに當世の事を以てす。是に由て感激して、先帝に許すに驅馳を以てす。後傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉ず。爾來二十有一年なり。先帝臣が謹愼を知る、故に崩ずるに臨み、臣に寄するに大事を以てす。――前出師表

と云つた。其の聞達を求めぬ心に、照烈帝の知遇に感激するの情が起つた故に五丈原頭に血を咯いて死ぬまでの壯烈なる働きが出來たのである。日蓮上人の如きも一點名聞を求めやうといふ心が無く『かゝる時刻に日蓮佛敎を蒙りて此土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背き難ければ』といふ決心であつ

求めざる心

時の不祥

たればこそ、彼の如き貴い事蹟を遺されたのである。然らば上人の世に出られた時の日本の佛敎は如何なる狀態であつたのか、その『かゝる時刻』と申されたのは如何なる時であつたか。

佛閣甍を連ね經藏軒を竝べ、僧は竹葦の如く侶は稻麻に似たり。崇重年舊り尊貴日に新なり――立正安國論

といふ如くに佛敎の隆盛を極めた時に當て、上人が決然として起たれたのには深い理由が無ければならぬ。

佛敎が支那に入つたのは後漢の明帝の時といへば、本朝は垂仁天皇の御宇に當る。その後佛敎は種々の迫害を堪へて、支那に於て次第に發展し、朝鮮を經て吾が邦に傳はつた。その初めて傳はつた年は固より明確に分らう筈が無い。吾が邦の人と朝鮮人との往來が頻繁になる間に、自然佛敎を傳へるものも出來たことであらう。繼體天皇の十六年に梁人司馬達等が歸化して大和國に住み、

佛敎の渡來

百濟王の上表

その家に佛像を安置して近方の者にも禮拜さしたといふが、此は紀元千百八十二年のことであるから、彼の後漢の明帝の時よりは四百五十年許の後である。百濟王が佛像經論を獻じたといふ欽明天皇の十三年は、此より三十年の後である。日本書記に出たる其の時の記事は

冬十月百濟の聖明王、西部姬氏達率怒唎斯致契等を遣して、釋迦の金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷を獻る。別に表して流通禮拜の功德を讃て云く、是の法は諸法の中に於て最も殊勝たり、解し難く入り難し。周公孔子も尙ほ知ること能はず。此の法能く無量無邊の福德果報を生じ、乃至無上菩提を成辦す。譬へば人の意に隨ふ寶を懷いて用ふべき所に逐ひ、盡く情のまゝなるが如し。此の妙法の寶も亦復た然り。祈願情のまゝに乏しき所無し。且夫れ遠きは天竺より爰に三韓に泊ぶ。敎のまゝに奉持し尊敬せざる無し。是に由て百濟の王臣明謹んで陪臣怒唎斯致契を遣して、帝國に傳へ奉り、畿內に流通すること、佛の所記の我が法は東流せんといふを果すなりと。是の日天皇聞已つて歡喜踊躍し、使臣に詔して云く、朕昔より來、未だ曾て是の如き微妙の法を聞かず、然れども朕自ら決せずと。乃ち群臣に歷問して曰く、西蕃の獻れる佛の相貌端嚴なる、全く未だ曾て看ず、禮すべきや不やと。蘇我大臣稻目宿禰奏して曰く、西蕃諸國一に皆之を禮す、豐秋日本豈に獨り背かんやと。物部大連尾輿、中臣連鎌子同く奏して曰く、我が國家の天下に王たるは、恒に天地社稷百八十神を以て春夏秋冬に祭ひ拜むことを事と爲せばなり。方に今改めて蕃神を拜むこと、恐くは國神の怒を致さんと。天皇の曰く、宜しく情願の人稻目宿禰に付し、試に禮拜せしめんと。大臣跪き受けて忻悅し小墾田の家に安置す。

とある。固より最初の事であれば、佛敎の深い意義などの分らう筈も無し、現世の福德果報を得るといふことが百濟王の表にもあり、又之を禮拜しやうとす

聖德太子

る者の信ずる所も只是れだけであつたのであらう。

其後佛教は次第に盛になつたが、聖德太子の出らるゝに及んで非常なる隆運に向つた。其の皇太子として攝政の任に當られたのは、推古天皇の元年で、百濟から佛像を獻じてより四十一年後である。此時太子は二十一歳であつた。此よりして四十九歳にして薨去せられたまで二十八年間は、吾が邦の文化を進めることに力を盡されると共に、佛法の興隆に尤も意を注がれたのである。日本書記に就て見ると、

元年、始て四天王寺を難波荒陵に造る。

二年、皇太子及大臣に詔して三寶を興隆せしむ。

三年、高麗の僧惠慈歸化す、皇太子之を師とす。

四年、法興寺造り竟る。

十年、百濟の僧觀勒來り、暦本及び天文地理の書、竝に遁甲方術の書を貢る。

十一年、始て冠位十二階を行ふ。

十二年、皇太子親ら肇めて憲法十七條を作る。

十三年、始て銅繡丈六の佛像各一軀を作る。

十四年、皇太子に請て勝鬘經を講ぜしむ。皇太子また法華經を岡本宮に講ず。

十八年、高麗王僧曇徴、法定を貢る。

廿二年、大臣（馬子）臥病、大臣の爲に男女一千人出家す。

廿四年、新羅佛像を貢る。

斯の如く佛法の興隆に關する記事が頻繁に見えて居る。なほ書記には法隆寺造營の事が見えて居ないが、是は推古天皇十五年の事であるといふ。又十四年の下に、彼の司馬達等の孫、鞍作鳥（くらつくりのとり）に懇な詔があつて、代々佛法を信ずることを賞せられ、大仁の位を賜ふことが載せてある。大仁とは十二階中の第三位である、まことに破格の御沙汰と思はれる。

太子の信仰と德化

聖德太子の國民一般に尊崇せられたことは非常なものであつたと見える。書記に推古天皇二十九年二月太子薨去のことを記して

是の時諸王諸臣及び天下の百姓悉く、長老は愛兒を失ふが如くにして、鹽酢の味口に在れども嘗めず、少幼の者は慈める父母を亡ふが如く、以て哭泣の聲行路に滿てり。乃ち耕夫は耜を止め、舂女は杵せず。皆曰く、日月輝を失ひ天地既に崩れぬ、自今以後誰をか恃まんやと。

とあるに依て、その樣を想見すべきである。太子の佛教に關する御研究は非常に深いものであつた。其の朝廷百官のために講ぜられた經は、維摩經と勝鬘經と法華經とで、いづれも大乘經の中で殊に深いものである。なほ太子は之を講ぜられたのみならず、三經の義疏を撰せられ、何れも今に傳はつて居る。

太子の信仰と其の功績

太子が攝政として國政に力を盡されたのみならず、學問藝術産業等一切の事に力を盡して、本邦の文明を進歩せしめた功績は極めて偉大である。それは天性の聰明であらせられたのみでは無い、常に堅固なる大乘佛教の信仰の上に其の心を托し、佛の大慈悲心を繼いで、一切衆生を愛撫したまふの志篤く在したが爲である。其の憲法の第二條に、

篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なり。則ち四生の終歸、萬國の極宗なり。何れの世、何れの人か是の法を貴ばざる。人尤だ惡きもの鮮し、能く教ふれば之に從ふ。其れ三寶に歸せずんば、何を以てか枉れるを直うせん。

とあるによつて太子の志の存する所を知るべきである。なほ憲法の中に『和を以て貴しと爲し、忤ふこと無きを宗と爲す』と教へ『忿を絶ち瞋を棄て、人の違ふことを怒らざれ』と教へ、『群臣百僚嫉妬有ること無かれ』と教へ、『私に背て公に向ふは是れ臣の道なり』と教へ、『大事は獨斷すべからず』と教へられたる如き、其の信仰の發現と思はれる。又『餐を絶ち欲を棄て明に訴訟を辨へよ』といひ、『國司國造百姓を斂すること勿れ』といふ如き、下民を憐みたまふの深

聖武天皇

きを見るべき語も少からずある。殊に賄賂の爲に訴訟の公明を缺くことを指摘して、

財有るものゝ訟は石をもて水に投ずるが如く、乏き者の訟は水をもて石に投ずるに似たり。是を以て貧き民は則ち所由を知らず、臣の道も亦こゝに闕けぬ。

とある如きは、下情に通ずること深くなくては到底いはれぬことである。

太子の薨去後も佛法は益々盛になり、歴代の天皇を始め皇室に於ても御尊信淺からず、殊に聖武天皇は光明皇后と共に非常なる御熱心を以て佛法の興隆を謀らせられたので、其の結果は着々として著はれた。天皇が至尊の御身として自ら三寶の奴と稱せられたといふことは、古來から國學者などの憤慨する所であるが、それは奈良の大佛が竣成したに就て、天平二十一年四月に東大寺に行幸になり、佛恩報謝の意を述べさせられた詔の初めに、

天皇の御信仰は何の爲か

三寶の奴と仕へ奉る天皇(すめ)らが大命(みこと)を、虛舍那像の大前に奏(まう)したまへと奏(まう)さく云々。

とあるのをいふのである。天皇が斯くも自ら謙して佛を崇められたのは、國家の安泰と庶民の幸福を謀る爲に佛の加護を祈るといふ御志に外ならぬのである。御先祖の神々を疎略にして佛に媚びたなどいふ譯では決して無い、斯くして國と民との爲に盡させらるゝのが卽ち御先祖の神々に仕へ奉る所以であると信ぜられてのことである。それは天皇の下された詔の多くによつて推すべきで、例へば天平十三年三月の詔に、

朕薄德を以て忝く重任を承く。未だ政化を弘めず、寤寐に慚づる多し。古の明主は皆先業を能くし、國泰く人樂み、災除き福至る。何の政化を修めてか、能く此道に臻れる。頃者年穀豐ならず、疫癘頻に至る。慙懼交々集り、唯だ勞はしく己を罪す。是を以て廣く蒼生の爲に遍く景福を求む。云々

行基大僧正

と釋迦牟尼佛の像を造らしめた理由を示されたのによつても明である。

また聖武天皇の御時には行基の如き高僧があつて、上下の歸依を得、佛法の興隆に與て大なる力があつた。行基は學博く信篤い人であつたのみならず、國利民福を進めるために力を盡したことも甚だ多く、實に立派な人物であつたやうである。續日本紀に記する所によれば、

道俗化を慕ひ、追從する者動もすれば千を以て數ふ。所行の處、和尙來ると聞けば巷に居人無く、爭ひ來て禮拜す。器に隨て誘導し、咸な善に趣かしむ。又親ら弟子等を率ゐ、諸要害の處に於て橋を造り坡を築く。聞見の及ぶ所咸な來て功を加へ、日ならずして成る。百姓今に至て其の利を蒙る。

とある。如何に朝廷の御歸依があつても、法を弘むる任に當る人に斯る大器が無くては、充分に法の弘まる筈はない。なほ行基の外にも高僧が少からず出て それ〴〵の力に應じて活動をしたのである。

三論宗
成實宗
倶舍宗
法相宗
華嚴宗
律宗

さて佛敎の最初に傳はつた頃には、何宗の敎義といふことも無く、極めて概括的のことのみが傳へられたのであるが、次第に弘まると共に、敎も漸く深みに入るやうになり、推古天皇の御代から奈良朝の末まで凡そ百五十年許の間に六宗が傳へられた。それに平安朝になつて傳はつた二宗を併せて八宗となるのである。卽ち推古天皇の三十三年（支那は唐の高祖の武德八年）に高麗の僧惠灌が三論宗と成實宗とを傳へたのがその初めである。此より凡そ三十年の後、孝德天皇の白雉四年に、元興寺の道昭が入唐して傳へたのが倶舍宗と法相宗である。其後六十餘年を經て、聖武天皇の天平八年に唐の道璿律師が華嚴宗を傳へた。其後二十年許にして孝謙天皇の天平勝寶六年に、唐僧鑒眞が律宗を傳へた、但し此時に天台宗の典籍をも共に持つて渡つたのであるが、此は世に弘めずに律宗のみを弘めたといふことである。以上を世に古都の六宗といふ、いづれも奈良の都をはじめとして全國に流布して互ひに其の盛を競ふたのである。又

彼の聖武天皇の御宇に來た道璿が禪宗をも傳へたけれども、此は世に流布せずして終つた。

平安朝になつて、天台眞言の二宗が起り、前の六宗は殆んど之に壓せられて勢を失つてしまつた。天台宗の起つたのは傳敎大師の力によるのであるが、其の研究の資料を持ち傳へた彼の鑒眞和尙の功をも沒することは出來ぬ。傳敎大師は諸宗の敎義を究めて後、天台宗に及ぶものゝ無いことを明にしたので、之に就て日蓮上人の記された所極めて明確である。

傳敎大師と天台宗

人王五十代、像法八百年に相當て、桓武天皇の御宇に最澄と申す小僧出來せり。後には傳敎大師と號し奉る。始めには三論、法相、華嚴、倶舍、成實、律の六宗竝に禪宗等を行表僧正等に習學させ給ひし程に、我と立て給へる國昌寺、後には比叡山と號す。此にして六宗の本經本論と、宗々の人師の釋とを引合せて御覽ありしかば、彼の宗々の人師の釋、所依の經論に相違せる事多き上、僻見多々にして信受せん人人皆惡道に墮ちぬべしと考へさせ給ふ。其上法華經の實義は宗々の人々我も得たり我も得たりと自讃ありしかども其義なし。此を申すならば喧嘩出來すべし、默して申さずば佛誓に背きなんと思ひ煩はせ給ひしかども、終に佛の誡を恐れて、桓武皇帝に奏し給ひしかば帝此事を驚かせ給ひて六宗の碩學に召合させ給ふ。彼學者等始めは慢の幢山の如し、惡心毒蛇のやうなりしかども、終に王の前にして責落されて、六宗七寺一同に御弟子となりぬ。——撰時鈔

六宗の歸伏

此の叡山創基は延曆七年で、大師二十二歳の時である。欽明天皇十三年から二百三十六年を經、初めて眞の法華經讀誦の道場が出來たのである。尤も法華經を貴むことは奈良朝時代からのことで、法華經を讀誦し若くは書寫する等のことは史上に夥しく見えて居る。しかし一代聖敎中に於ける法華經の地位を明にして之を讀誦し受持することは、此時に始まるといはなければならぬ。

傳教と弘法

また南都六宗の高僧等との問答は延暦二十一年の正月、天皇が高雄寺に行幸あつて、六宗より選出した十四人の人々と傳教大師と對論せしめられたのである。而して六宗の人々が全く屈服したことは、其の謝表の文の中に、

聖德の弘化より以降、今に二百餘年の間、講ずる所の經論その數多し。彼此理を爭て其の疑未だ解けず。而して此の最妙の圓宗猶ほ未だ闡揚せず。……三論法相久年の諍ひ渙焉として氷の如く解け、照然として既に明に、猶ほ雲霧を披いて三光を見るが如し。

と記したによつても明である。此より二年後の延暦二十三年に傳教大師は入唐した。弘法大師の入唐も同時であつた。時に傳教大師は三十八歳、弘法大師は三十一歳であつた。此時唐に於ては妙樂大師已に寂し、その高弟たる道邃、行滿の二人が教系を繼いで居た。傳教大師は此の二人に就て教へを受け、翌年歸朝の後は朝野の尊信益々加はり、叡山は鎮護國家の道場として日に益々榮えた。

弘法と眞言宗

弘法大師は唐の青龍寺の慧果和尚に就て眞言の教義を學んで歸つた。此より以前に眞言の教義は善無畏三藏によつて本邦に傳へられたが、世に流布せずして終つたのである。善無畏は中天竺の國王であつたが、位を其子に讓つて出家し、唐の玄宗の時に支那に渡り、本邦へ來遊したのは元正天皇の御宇である。弘法は其の持來つた書によりて眞言宗を究め、その後入唐して更に深く之を究めたのであるといふ。しかし傳教大師より年下であつたのみならず、凡ての點に於て後輩であつたから、大師の存生中は別段目覺しい活動もしなかつた。傳教大師は嵯峨天皇の弘仁十三年に寂し、弘法大師は仁明天皇の承和三年に寂し、その間十三年を隔てゝ居る。眞言宗が發展の基礎を作つたのは此の十三年間のことである。其の主張する所によれば、釋尊の教へられた所は其の最も深いものでもまだ至極したものとは謂はれぬ。大日如來の教へられた所こそ凡ての中の最も深い教へである。それで前者を顯教といひ後者を密教といふ。諸經の中

叡山の降伏

に於て法華經第一と、天台宗に於て立てるのに反對して、『大日經第一、華嚴經第二、法華經第三』とする。而もたゞに法華經を第三と下すのみならず、

此の如き乘々、自乘に名を得れども後より望めば戯論と作す。――十住心論

とまで云つた。此の如き論に對して叡山の一門は飽くまで法華第一を主張して其の誤を匡さなければならぬ筈である。然るに日蓮上人が

日本國は叡山計りに傳敎大師の御時、法華經の行者まましけり。義眞圓澄は第一第二の座主なり。第一の義眞計り傳敎大師に似たり、第二の圓澄は半ば傳敎の御弟子、半ば弘法の弟子なり。――報恩鈔

と書かれたる如く、圓澄の時から既に眞言宗に傾き、第三の座主たる慈覺大師に至ては全く眞言に歸し、入唐して歸朝の後。彼の善無畏の大日經の疏に倣つて、金剛頂經と蘇悉地經の疏を（此を併せて眞言の三部經といふ）書いた。相對立してゐた二大勢力の一方が他の方に降つたのである。此より眞言の全盛時代となつたのはいふまでも無い。日蓮上人が

されば桓武傳敎等の日本國建立の寺塔は、一宇もなく眞言の寺となりぬ。――撰時鈔

と慨歎せられた通りである。叡山は形に於て益々榮えたが、精神は既に失はれてしまつたのである。

三井寺

しかし形に現はれた天台宗の發展は目覺しいものであつた。義眞の弟子の圓珍（卽ち智證大師）は仁壽三年に入唐し、五年の後歸朝してより朝廷の御覺えことにめでたく、貞觀十年近江國三井の園城寺を賜はつてこゝに居た。此の三井寺は天智天皇の御宇に創められたものであるが、此に至て天台の寺となり、叡山と相對峙して大なる勢力の中心となつた。これは傳敎大師が叡山を開いてから八十年の後である。智證大師が後に叡山の座主となつてからも、三井寺は益々榮え、絕えず叡山と勢力爭ひをして、淺ましくも武力に訴へたとも少くな

東密と台密

かつた。彼の眞言宗は弘法大師の時に京都の東寺を賜はつて密敎の道場とした所から、『東密』と稱し、之に對して天台宗が密敎になつたのを『台密』と稱する。叡山と三井寺とは台密の二大源泉である。なほ又南都の諸寺にも密敎の勢力が及んだことであるから、平安朝の中葉以後に於ては全國盡く密敎の下に歸したと稱して誤りは無い。

墮落した佛敎

斯くて後寺は愈々榮え、僧は益々世に重んぜられたが、佛陀の精神は次第に失はれて來たのである。元來佛敎が隆昌を極むるやうになつたのは、皇室の御歸依を得、また權門の歸依を得たのが大なる原因となつて居る。皇室に於て佛敎を重んぜられたことは、彼の聖武天皇の詔にも見える如く、國を治め民を安んぜんが爲に佛力の加護を賴むといふ目的の爲である。されば僧侶たる者が一切衆生を敎へ導くべき職分を忘れ、朝家の御威光や權門の勢力を假りて其の私を營むといふやうなことの有るべき理はない。

法は軌則なり、師は訓匠なり。……能く妙法を以て他に訓匠す、故に法を擧げて師に目す。——法華文句

とある如く、法師たる者は世俗の外に立て世俗を導かなければならぬ者である。然るに實際は斯の理想に遠ざかること甚だ遠く、佛敎の隆盛に伴つて種々の弊害も生じて來た。しかし彼の聖武の朝に於ける行基良辨の二人をはじめ、奈良朝から平安朝の始めにかけては僧侶の中に立派な人物が少くなかつた。その頃の所謂高僧は佛敎の敎理に精通したのみならず、識見も高く抱負も大きく、世間の形勢にもよく通じ、何事に就ても先覺者であつた。傳敎大師の如きも、若し政事家として世に立たせたら、天子を輔けて善政を國に布くべき力量と才幹とを充分有した人と思はれる。然るに平安朝も漸く末に近づいて來ると、僧侶に斯る偉大な人物は全く無くなり、たゞ權門の意を迎へて、其の寺と其の身との繁榮を謀ることをのみ旨とする有樣となつた。

遊戯的の信仰

殊に全國一般に密教となつて後は、加持祈禱が僧侶の重なる業となつてしまつた。勿論仁王會とか維摩會とかいふこともあり、又法華八講などいふことも行はれ、莊嚴な儀式を具へて經を誦し又は講ずる事が絶えず催されては居たがそれは聖德太子が經を講ぜられたなどゝは全く異り、たゞ其の型が美しく演ぜられたのみの事である。其の席に列る公卿や宮女も、經の貴い意義を知らうなどといふ望みは全くもたず、たゞ其の式の莊麗なのを見るのが目的で（モットで）集るだけのものであつた。平生の信仰といへば斯る遊戯的のものであるが、何か事が起ると眞面目に信心を始める。その時には必ず僧に賴んで祈禱をして貰ふのである。而して其の佛に祈る所は專ら現世の利益である。それも多くは個人の欲望を滿足せしむることが主であつた。一門の繁昌を祈る、官職の陞ることを祈る、安產を祈る、盜賊の難を除けるやうに祈るといふ類である。或は

現世の利益の爲の信仰

淺ましき法師等

他の者と勢力爭ひをして居る際に、敵手たる者の失敗を祈る。或は戀の成就を祈る、或は男子の出生を祈る。その外何によらず、現世に於て福を招き災を除くことを祈るのである。而も自ら反省して身を慎み心を淨うすることは殆んどせず、たゞ僧に賴んで祈るのである。俱舍論等に出て居る十惡の中に『邪見』といふのがある。邪見とは『正しき因果を撥して、僻信をもて福を求むる』をいふのである。此等の徒は盡く邪見の者といはなければならぬ。

其の邪見を輔け、その遊戯の御相手を巧みにすることに依て、伽藍も建立せられ、田地も寄進せられ、僧の官職も陞るのである。又時には權門の人が遊戯的に出家することもある。例へば藤原道長は五十四歳で出家し、五十七歳で法成寺を立てこゝに居り、六十二歳で死んだが、出家して後も豪奢を極めて居た樣である。斯ういふ例はまだ外にも少くない。斯る權門の保護を受け、宮女などの間に立入つて祈禱の用を勤める法師に眞面目な者のあらう筈はない。多くは

僧兵

其の品行に於ても、其の志操に於ても汚下を極めた者のみで、且は互ひに勢力を爭ひあひ、暗鬪の絶え間は無く、眞に煩惱の固まりともいふべき者であつた。又有力な寺々は互ひに勢力を爭ふのみならず、其の所領の爭ひから種々の紛議を生じ爭鬪を起すやうになつた。後には互ひに兵士を養ひ、僧侶自身にも武技を練習する者が多くなり、『僧兵』といふ名さへ出來た。又所領などの事に就て裁決が氣に入らぬと、數百人徒黨を組んで京都の御所に押寄せ嗷訴をすることも度々あつた。就中叡山の僧は山王の神輿を荷つて嗷訴し、南部興福寺の僧は春日の神木を先に立てゝ嗷訴し、非常に當路者を苦しめた。數百年の間續いた藤原氏の勢力を一擊にして推し拉かれた白河院さべ、思ふに任せぬものとして加茂川の水と、双六の賽と、山法師（叡山の僧のこと）を數へたまふ程であつた。

斯く一般の僧侶が佛の敎へに遠ざかり、淺ましい有樣に墮ちて行く間に新な

痛切なる信仰の要求

一般人民の困苦

る敎への起るべき機運は次第に動いて來た。世間が盡く遊戯的の信仰や、現世の利益をのみ求めて居たわけでは無い。眞の信仰を要求する聲は次第に高まつて來た。それは下層の人民の間にも、華やかなる宮廷の間にも共にあつた。

藤原氏が勢力を長じ、日々に華やかな生活を續けて、花に對しては『さくらかざしてけふも暮しつ』と詠じ、月にむかひては『かけたることも無しとおもへば』とうたひ、所謂詩歌管絃の興を催して夢のやうにすぐる間に、一般人民の困苦は次第に增して來た。大臣とか大納言とか參議とかいふ高い地位は皆藤原氏一門の者が占有して居たのであるが、それ等の人々はたゞ自分の地位を高め勢力を高めることにのみ意を用ゐて、人民の生活などに就て心を勞することは無かつた。京都と地方とは全く懸け隔つて居て、地方の事は國司などに任せぎりである。其の國司なる者も多くは京都に住んでゐて、任地の事は屬僚に任せて宜きやうに取計らはせるといふ有樣である。斯る有樣であれば勿論その屬

僚の管督や取締りの出來やう筈はない。彼等は殆んど皆私利を謀る者のみで、重稅に苦み寃罪に泣くものは到る處に充ちて居た。隨てまた各地ともに風紀は頽廢し、盜賊は横行して良民を惱ました。

世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば——山上憶良

といふやうな歎聲は次第に世間に滿ちて來た。人民は斯る苦境にあつて其の苦を訴ふるに所無く、また之に同情をもつて慰め勵ます人も無かつた。彼等を慰安してやるのが佛の慈悲を承け繼ぐ所の僧侶の任であるが、それは權門の歸依によつて繁昌を謀らうとする僧等に望まるべき事では無い。又長い歲月の間多くの艱苦を嘗めて、貧賤の家に生れた身の運命を自ら咒ふやうになつてしまつた者の痛切なる悲みは、現世の利益を祈ることをのみ專門とする當時の僧等の力で、如何することも出來るものでは無かつたのである。

また一方の榮華を極めた宮廷の生活も、その裏面には幾多の悲慘な事が潛んで居た。公卿や宮女が詩歌管絃に興を催して居た間に於て、互ひに勢力を爭ふの念は恐ろしく發達してやがて猜疑嫉妬の情を際限も無く增長せしめた。

虛榮の人は眞に孤獨の人なり。——アウエルバッハ

とは至言である。其の嫉妬心の長ずるに及んでは、一家一門の中でも互ひに敵となる。世の中に信じあふなどゝといふ人は一人も無くなつてしまふ。其の勢力爭ひに失敗したものゝ苦悶はまた非常なものである。殊に婦人はいつも親や兄の勢力を作る道具に使はれて、嫉妬の嵐の吹き狂ふ宮廷の生活をして居るので、その心は片時でも休まる暇は無い。一人が懷姙して安產の祈禱をして居れば、之と勢力を爭ふ一人は之に對して呪詛の祈りをして居るといふ有樣である。古い物語りを見ると『物の怪』といふことが頻出して居る。互ひに他の怨みを受けたり、又他を怨んだり呪つたりすることの多かつた時代には免れ難いことである。絢爛を極めた宮廷の生活の裏面に斯る悲しい潮流の漲つて居るこ

とは、人々をして無常を觀ぜしむべき最も有力なる原因である。

人として生を欲せぬ者はない。而も其の生きるに就ては、平和に生きたい、長く生きたいと望むのが人情である。然るに生きるが爲に多くの苦惱を受け煩累に纏はれねばならぬを歎ずる者が、見窶しい草の屋の中にも、華やかな宮殿の中にも、次第に多くなつて來るのである。此の時に當て彼等が爲に永恒にして平和なる生を享くる方法を指示するものがあれば、草の風に靡くが如き勢を以て之に從ふべきは疑ひを容れぬことである。佛敎の中には、斯の如き要求に應ずべき敎へが正しく存在するのである。それは卽ち念佛門に於て示す所の他力本願の敎へである。此の世を假の世と斷じ、此の世に於て吾々の見聞することに一として常住のものは無いと說き、如何なる榮華も、如何なる希望も皆賴むに足らぬと爲し、賴むべきはたゞ西方の極樂淨土に於ける永恒の生活である と敎へる。而して此の永恒の生活を得ることは、たゞ阿彌陀佛を信ずるによつてのみ得らるべきであると敎へる。是れ則ち念佛門の主張であつて、後に法然上人が、

十方に淨土多けれども西方を願ふは、十惡五逆の衆生の生るゝ故なり。諸佛の中に彌陀に歸し奉るは、三念五念に至るまで自ら來迎し給ふ故なり。諸行の中に念佛を用ふるは、彼佛の本願なる故なり。今彌陀の本願に乘じて往生しなんに、願として成ぜずといふことあるべからず。本願に乘ずることは信心の深きによるべし。受け難き人身を受てあひ難き本願にあひて、發し難き道心を發し、離れ難き輪廻の里を離れて、生れ難き淨土に往生せんこと悅びの中の悅びなり。——一紙小消息

と記したのはよく其の要領を盡したものである。

此の敎へは印度に於ても疾くより發達して居たのであるが、支那に入ては唐の道綽、善導等の人々の力で完成せられた。本邦に於ては空也上人が市に立つて

惠心僧都

念佛を勸めたのに端を發し、法然上人の出るに及んで搖すべからざる根柢を作つた。空也は天台宗の僧であつたが、他の僧等が權門に出入して名利を求めてゐたのと全く選を異にし、朱雀天皇の天慶元年の頃から、京都の市街に立つて道を往く人に念佛をすゝめ、現世の望みに囚はるゝことを止めて極樂往生を期せよと敎へた。實に一般人民の爲には旱天の雨雲の如きものであつた。その後東國に化を布き、三十餘年間盛に活動した。之に續いて有名なる往生要集の作者惠心僧都が出た。是も天台宗の僧であるが、その著の中には純乎たる他力の敎へが說かれてある。往生要集の成つたのは圓融天皇の永觀二年である故に、空也の念佛を唱へ始めてからは四十六年の後である。此の集の始めに、

總て十門あり、分て三卷と爲す。一には厭離穢土、二には欣求淨土、三には極樂證據、四には正修念佛、五には助念方法、六には別時念佛、七には念佛利益、八には念佛證據、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。

永觀

良忍の融通念佛

とある、以て內容を推すべきである。此人は空也よりも更に學識も深く、朝野の尊信も厚かつた故に、その念佛敎の勃興に貢獻した所は更に偉大であつた。其後堀河天皇の御宇に至り眞言宗の僧永觀が出て念佛の貴いことを唱へ、寬治八年には丈六の阿彌陀像を作つて信仰をすゝめた。而して其の示寂まで四十年許の間熱心に念佛を世に弘めた。之にやゝ後れて鳥羽天皇の永久五年、天台宗の僧良忍が新に融通念佛を唱へ出した。其の融通念佛といふ意は我が念佛の功德一切の人に融通し、一切の人の念佛の功德我に融通し、また念佛の功德一切行に融通し、一切行の功德念佛の一行に融通し、一切の功德こゝに圓滿して極樂往生するとの意である。

斯く王朝時代の佛敎は念佛の勃興を以て其の結尾とする。而して此等の細流が合して、法然上人の淨土宗といふ大河となり、全國に橫流するのが卽ち次の武家時代劈頭の壯觀である。

3、日蓮上人以前の佛教——武家時代

日蓮上人が諸宗の教義に折伏を加へられた中に、殊に力を用ゐられたのは眞言と念佛とである。而して念佛の勢力は眞言よりも更に偉大であつたのである。斯る偉大な勢力は王朝時代から疊まり來つて出來たものではあるが、之を大成したものは法然上人である。

法然上人の淨土宗

佛法日本に渡て七百餘年、一切經は五千七千、宗は八宗十宗、智人は稻麻の如し、弘通は竹葦に似たり。然れども佛には阿彌陀佛、諸佛の名號には彌陀の名號ほど弘まりて在するは候はず。此名號を弘通する人は、惠心は往生要集を作る、日本國三分が一は一同の彌陀念佛者。永觀は十因と往生講の式を作る。扶桑三分が二分は一同の念佛者。法然選擇を作る、本朝一同の念佛者——。撰時鈔

と日蓮上人の申された通りである。法然上人が淨土宗を唱へ始めたのは、高倉天皇の安元元年で、平清盛執政の時である。彼の空也上人が念佛を始めた時からは二百三十七年後に當り、日蓮上人の立宗に先だつこと七十八年である。法然上人は元來天台宗の僧であつたが惠心僧都の往生要集を讀んで大に感じ、更に自ら研鑽を重ねて、四十三歳の時に新に淨土宗を開いた。それより三十餘年の間弘通に努めて、建暦二年八十歳を以て示寂した。

其の時代

其の生れた年の長承二年は崇德天皇の御宇で、鳥羽上皇が院中に政を聽き給うた頃である。其の示寂の建暦二年は順德天皇の御宇で、鎌倉は實朝將軍の時である。卽ち其の八十年の生涯に於て保元の亂と平治の亂を見、院中政治の倒れたのを見、平氏の隆盛と滅亡との終始を見、源氏の隆興を見、又その漸く衰運に向はんとするを見たのである。彼の西行法師が、

すゞか山うき世をよそにふりすてゝいかになり行くわが身なるらむ

と詠じて遁世したのは、上人が八歳の頃であつた。天性の聰明なのに加へて、

宗教心を刺激すべき事實

斯る有爲轉變定まり無き世の有樣を見たのである、厭離穢土欣求淨土の情を强うしたのは當然である。

斯る時代に在て、一般に宗教心の强くなつて來たのも自然の勢といはなければならぬ。一體藤原氏の繁昌はいつ迄續くか分らぬやうに見えて居たのである。それが忽然として、大木が嵐に折れるやうに折れて院中政治となつたので、世人はたゞ事の意外に驚きあきれて居た。然るに其の後の變轉はまた幾倍か烈しく、淸盛が太政大臣となつてから十八年の後に平氏は亡びた。賴朝が征夷大將軍となつてから二十七年の後に源氏の正統は絕えた。平氏が信心した嚴島の辨天も、源氏が氏神として尊んだ鶴岡の八幡宮も更に利益を與へられぬ。此等の事を見聞した一般の人民が、自然と世の無常を觀ずるやうな氣になつたのは當然である。且又此間には殆んど間斷なく戰爭があつた。戰爭に加はつた武士達は生別死別の悲みを常に見て居た。又戰爭に加はらぬ農民や商賈等も家

時代の要求に應ずる教

法然上人の態度

を燒かれ田地を踏潰され、一家離散の憂き目にあふことも稀では無かつた。

世の中をおもひつらねてながむれば空しきそらに消ゆる白くも——後成

といふやうな感じは、歌人ならぬ者でも一般にもつやうになつたのである。法然上人の教へは實に斯る時代の要求に應ずるに最も適したものである。其の忽ちにして國內を席卷するの勢となつたのも異むに足らぬことである。後の人之を稱して、

終にほまれ一朝にみち益四海にあまねし。これ彌陀の一教わが國に緣深く、念佛の勝行末法に相應する故なるべし。——法然上人行狀畫圖

と云つたのも誇張の言では無い。

法然上人は天性聰明で學問も深く識見も高かつた人と思はれる。それが四十三歲まで研鑽を積んで立てた宗旨である。然るに其のいふ所によれば、

たゞ往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申して、疑ひなく往生するぞと思ひ

凡夫と淨土

とりて申すほかには、別の仔細候はず。……此外に奥深きことを存ぜば、二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不通の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同うして、智者の振舞をせずして、只一向に念佛すべし。――一枚起請文

とあつて、專ら彌陀の慈悲に賴り、學問や才能は一切思ひすてゝ極樂往生を期するのが主となつて居る。如何なる凡夫でも彌陀を賴みさへすれば極樂へ往けるといふのが非常に尊いといふのである。されば又、

上人或時語りてのたまはく、われ淨土宗を立つる心は、凡夫の報土に生るゝことを示さんが爲なり。もし天台によれば、凡夫淨土に生るゝことを許すに似たれども、淨土を判ずること淺し。もし法相によれば、淨土を判することを深しといへども、凡夫の往生をゆるさず。諸宗の所談ことなりといへども、すべて凡夫報土に生るゝことを許さゞる故に、善導の釋義によりて淨土宗を立つる時、すなはち凡夫報土に生るゝことあらはるゝなり。――行狀畫圖

現世の意義

ともある。此にいふ報土は卽ち極樂淨土である。此の極樂淨土に於ける永遠無窮の平和なる生活を思へば、此の世の五十年や六十年の生命は如何にならうと問ふに足らぬことである。此の中に榮枯盛衰の變があらうとも、悲むにも足らずまた喜ぶにも足らぬ。其の一人の弟子の問に答へた中に、

後生をば彌陀の本願をたのみ申さば往生疑ひなし。現世をばいかゞ計らひ候べきと。上人のたまはく、現世をすぐべきやうは、念佛の申されん方によりて過ぐべし。念佛のさはりとなりぬべからん事をばいとひ棄つべし。……妻子も從類も、自身たすけられて念佛申さんためなり。念佛のさはりとなりぬべくば、ゆめ〳〵持つべからず。所知所領も念佛の助業ならば大切なり妨にならばもつべからず。總じてこれをいはゞ自身安穩にして念佛往生を遂げんが爲には何事も皆念佛の助業なり。――行狀畫圖

とあるは注意すべき語である。此の世の凡ての事は來世の爲に役立てば意味があり、役立たなければ意味が無い。其の事自身には何等の深い意義も價値も無いのである。

然らば來世に於て永く淨土の樂みを得ん爲には、阿彌陀佛より外に賴るべきものは無いかといふ問題が起る。一代聖敎何れも貴い中に、何故阿彌陀經等にのみ賴るのか。之に就て道綽禪師の釋が法然上人の著はした選擇集の劈頭に出てゐる。

問て云く、一切衆生皆佛性あり、遠刼よりこのかた多佛にあふべし。何によつてか今に至るまで、なほ自ら生死に轉廻して火宅を出ざる。答へて云く、大乘の聖敎に依るに、良に二種の勝法を得てもて生死を拂はざるによる、是を以て火宅を出ず。何ものをか二とす。一にいはく聖道門、二にいはく往生淨土なり。その聖道の一種は今時證し難し。一には大聖を去ること遙遠なるによる。二には理深く解微なるによる。――安樂集

此の聖道門を難行道といひ、念佛門を易行道といふ。天台華嚴等の諸宗の如く、深遠なる敎理を究めて成佛を期するは難行である。たゞ彌陀の慈悲に賴つて成佛するは易行である。既に彌陀の慈悲に賴る以上は、此より外の事を一切思ひ捨て、專ら念佛のみをしなければならぬ。彼の空也にせよ惠心にせよ、念佛の貴いことは敎へたが、他の行を一切止めよとは敎へなかつた。法然上人に至ては念佛以外を一切雜行として斥けるのである。故に專修念佛の稱がある。善導の敎ふる所によれば、

行に二種あり、一には正行、二には雜行なり、正行といふは專ら往生經によりて行を行ずるもの、これを正行と名く。……この正の中に就てまた二種あり。一には一心に專ら彌陀の名號を念じ、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々にすてざるもの之を正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に。もし

禮誦等によるをば、則ち名けて助業とす。この正助二行を除きて以外、自餘の諸善を盡く雜行と名く。――觀經疏

とある。選擇集の中には之を解すること極めて親切である。正行を五種とすといふは、一に『讀誦正行』卽ち觀經、阿彌陀經、無量壽經を讀誦すること。二に『觀察正行』卽ち西方淨土のことを思想し觀察し憶念すること。三に『禮拜正行』卽ち彌陀を禮拜すること。四に『稱名正行』卽ち彌陀の名號を唱へること。五に『讚歎供養正行』卽ち彌陀を讚歎し供養することである。此中第四のを特に正行とし、他の四種を助行とする。此の正助二行以外如何なる經を讀むことも、如何なる佛神を禮拜することも、一切皆雜行として排斥するのである。法然上人は更に

若しよく上の如く念々に相續して畢命を期とする者は、十は卽ち十生じ、百は卽ち百生ず。……但心を專にして爲さしむる者は、十は卽ち十生ず。雜を修して至心ならざる者は、千が中に一も無し。――往生禮讚

との文に依て、

豈に百生の專修正行をすてゝ、固く千中無一の雜修雜行を執せんや。行者よく之を思量せよ。

と斷言した。此の選擇集は淨土宗の根本教義を示したものであつて、此中に、凡て此集の中に聖道淨土の二門を立つる意は、聖道を捨て淨土門に入らしめんがためなり。

隨他の前には暫く定敎の門を開くと雖も、隨自の後には還つて定敎の門を閉づ。

夫れ速に生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中には、且く聖道門を閣て選んで淨土門に入れ。淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に、且く諸の雜行を拋て選んで正行に歸すべし。

等の語によつて、念佛以外の善行を盡く排斥してある。これを『捨閉閣抛』といふのである。『定散』とは悟つた心、卽ち定心で爲す善を定善といひ、悟らぬ心、卽ち散心で爲す善を散善といふ。定善も散善も共に極樂往生の用には立たぬといふのである。此の世が苦惱に充ちた場所であることを痛切に思ひ知つた人々が、此外に西方淨土の樂しい生活のあることを示され而も、

いにしへ智者たちの申されしは、念佛して極樂に往生すといふ事、さらに別の子細なし。いかなる惡人なれども、たすけ給へと思ひて南無阿彌陀佛と唱ふれば、佛の本願に乘じて必ず生るゝなり。その願といふは四十八願の中の第十八の願に、設我得レ佛、十方衆生、至心信樂、欲レ生二我國一、乃至十念、若不レ生者、不レ取二正覺一と說き給へるなり……己が力にて生ればこそ身の程をもかへりみめ。佛の願力によるべからんには、いかさまにてこそ叶はめなど思ふまじき事ぞかし。――歸命本願鈔

といふやうな意味で、たゞ念佛さへすれば何等の困難を冒さずとも此の樂しい生活に入ることが出來ると敎へられたのである。此の敎へが忽ちにして一世を風靡し、釋迦も大日も押し片づけて、たゞ彌陀の尊像を安置し、日夜に念佛を唱へる家のみとなつたのは自然の勢といふべきである。

但し淨土宗の敎へが凡ての人の心の要求に滿足を與へ得るものであつたら、之を以て日本の佛敎を統一することも出來たであらうが、其の力の無かつた爲に、他の一宗の勃興を催すに至つた。それは卽ち禪宗である。禪宗は王朝時代に一度渡つて、世に行はれずして終つたが、此に至つて再び支那から渡來し、次第に大なる勢力となつた。他力によつて往生を期する淨土の敎へと、自力によつて佛心を發明することを主とする禪の敎へとは、まことに好個の對照を示すものである。法然上人が、

月かげのいたらぬ里は無けれどもながむる人のこゝろにぞすむ

他力對自力

と詠じたその月は、彌陀の慈悲の光である。道元禪師が、

波も引き風もつながぬすて小舟月こそ夜半のひかりなりけれ

と詠じたその月は自己の本性である。法然上人の志した所は、

柴の戸にあけくれかゝる白雲をいつむらさきの色に見なさむ

の一首にもよく現はれ、道元禪師の觀じ得た所は、

峰のいろ溪のひゞきも皆ながら我が釋迦牟尼の聲と姿と

の一首にもよく見えて居る。此の自力の敎へは彼の他力の敎へと對立して相下らざるべき根抵を人の心の底にもつて居るものである。

世の煩はしく厭はしいのを避けて、西方の淨土に安樂の處を求むるのみが斯る時代に處する唯一の道では無い。澤庵和尙が鍋島侯に答へた書の中に、

譬へば玆に何百兩の黃金あらんを、人をして守護せしめんに、室を閉ぢ扉を鎖して其傍に坐し守て、人にも取られずとて、中々氣力有らんずる者の手柄

眞正參禪の士

とも働とも申さるべき事にし非ず。是を二乘聲聞の自了偏枯の修業に比す。又一人有り、群盜蜂の如くに起り、凶黨蟻の如くに馳廻らんず中を、かの金を持して何某の處まで贈り屆けよと命ぜられたらんに、彼の男膽氣あつて大劍を挾み脛高く褰げ、かの金を取て棒頭に突掛け、打傾けて一交もせで彼所へ贈り屆けて少しも恐るゝ氣色なくんば、天晴甲斐々々しき働き、大丈夫の氣象とも稱嘆すべき事なり。これを圓頓菩薩の上求菩提下化衆生の眞修に比す。何百兩の黃金とは正念工夫堅固不退の大志をいへり。群盜蜂の如く凶黨蟻の如しとは、五蓋十纏五欲八邪の妄念をいへり。彼男とは眞正參禪圓頓究竟の上士をいへり。何某の處とは常樂我淨の四德具足大寂彼岸の寶所をいへり。

——遠羅天釜

と示された如く、有らゆる障りの中を突破して自ら安樂の別天地を見出す工夫を敎へるものが別に佛敎中に存在するのである。

『禪定』とは心を一處に落着けて散さぬをいふので、例へば六度の中にも禪定が其の一に敎へられてある。（六度とは生死の海を度つて涅槃に達する行法として六を擧げるので、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をいふ）しかし禪宗といふはその禪に比べて特殊の意味でいふのである。

禪何物ぞ乃ち吾が心の名なり。心何物ぞ、卽ち我が禪の體なり。……唯だ禪と心と異名同體なり――中峯錄

と云つてある。なほ又、

直に本根を截て佛の內心に契ふ、而して的々承稟して敎外に之を傳ふるを佛心宗と謂ふ。其の行貌の定止に似たるを以て李唐より始めて禪宗と名く。而して六度の禪に非ず、所謂敎外別傳祖師禪なる者なり。――本朝高僧傳

ともある如く、佛心宗といふ名の方が寧ろ適當なものであらう。正眼國師の語にも、

人々みな親の生みつけてたもつたは不生の佛心、佛心は不生にして靈明なものに極まりました。不生で一切事が調ひます程に、みな不生の佛心で居らしやれい。不生佛心でござれば今日の活佛と云ふものでござる所で、不生で居ますれば迷ふやうがござらぬ程に、迷はにや悟りはいりませぬ。直なことじやござらぬ。不生な物は不滅なものに極まりました程に、身共は唯不生とばかり說きまして不滅とは云ひませぬ。……不生なことを決定しますれば、其の決定しました場より人の心肝を見る眼が開けますわい。身共は終に見そこなふたことはござらぬ。不生な人は誰でも同じことでござる所で、それ我宗を明眼宗と白す。又人々親の生付けてたもつたは不生の佛心一つでござる。その不生の佛心一つのまゝで居ます故に、又我宗を佛心宗と云ひます。――

玄旨軒眼目

とある。また法燈國師の語に、

佛心と衆生心

經に云く、心佛及衆生、是三無二差別。問ふ、何ぞ等しきや。答て云く、佛心は明なる鏡の如し、衆生心は曇れる鏡の如し。鏡の像は一つなりと云へども、妄想の塵に覆はるゝ故に衆生と名く、妄塵なきを佛と名く。若し人、心佛衆生一つなることを知て一念翻せば、則ち是佛なり。故に人我心をさとらずして外に向て佛を求めば、火を以て火を求め、牛にのつて牛を尋るが如し。身をはなれて佛を求ることなかれ。……釋迦如來我等が迷ふことを知りたまひて、衆生卽ち佛なりと、ねんごろに說きたまふに何ぞ驚かざらん。——法燈國師法語

とあるは、よく平易にその意を悉したものである。

彼の極樂往生を求め彌陀の本願に賴つて、此の世の苦惱を離れんとする者は此の世の名聞利欲に執着せぬ故に、無事平穩に此の世を送ることは出來るであらう。又如何なる苦境をも忍ぶことは出來るであらう。しかし自ら進んで大事に當り、自ら進んで險難の中を突破して行かうといふ意氣を養ふことは困難で

武士と禪

ある。農民や商估などは兎も角も、武士は左樣に消極的の思想で世に立つべき者で無い。武士は戰場に臨まなければならぬのみならず、當時國政の樞機に當るものは武士であつて、國家の大事を處斷するのは武士の責任である。(例へば北條時宗は執權となつた時僅かに十八歲であつたが、蒙古から脅迫的の書面が來た時は、如何に我が態度を決定すべきかを分別し、裁定しなければならぬ責をもつて居た。)されば武士たるものは苦を堪へ忍ぶだけでは到底いかぬ。苦樂の爲に動されずして、如何なる場合にも泰然として居られるやうな修行を積むことが最も必要である。禪宗で敎へることは、最もよく此の要求に應じ得るものと思はれた。前に擧げた白隱禪師の書の中に、

いつしか上求菩提下化衆生の本願に契つて、塵中衣冠希有の善智識。誰か知らん劍を帶し鞍馬に跨つて往來しながら、時々に諸佛無上の法輪を轉じ給はんとは。然らば則ち强將下に弱卒なしと申す事の侍れば、龜氏慶喜身子滿慈

吾を救ふものは吾

等の有力の武臣は、野村田村等の人々を初め旗下には幾人も出來侍るべし。萬一天下の事故あらんに、大將も諸卒も通身一團の眞元氣、百騎を率して萬騎に對すといへども、從來生ある事を見ず、豈にそれ死あるべけんや、恰も鐵石を突立て行くが如し。靜なること山嶽の如く、疾きこと颱風の如し。向ふ處破らずといふことなく、觸る處碎かずといふ事なし。譬へば保元平治の亂軍中に在りと雖も無人の曠野に立つが如けん。それこれ之を眞の丈夫の志氣と云ふ。——遠羅天釜

とあるが如きは、武士たる者の共に望む所でなければならぬ。

要するに生死の別、苦樂の差等に吾々の心が煩されてゐる爲に、苦みも恐れも生じて來るのである。斯る差別を離れた吾が本性を捉へ得る時には、如何なる境界に在ても、その境界の爲に煩されずして常に泰然自若たるを得べきである。

臨濟慧照禪師は、

三界無レ安、猶如二火宅一、此は是れ儞が久しく停住する處にあらず。無常の殺鬼、一刹那間に貴賤老少を揀ばず。儞祖佛と別ならざるを要せば、但だ外に求むること莫れ。儞が一念心上の清淨光、是れ儞が屋裏の法身佛なり。儞が一念心上の無分別光、是れ儞が屋裏の報身佛なり。儞が一念心上の無差別光、是れ儞が屋裏の化身佛なり。……但だ一切時中更に間斷莫し、觸目皆是なり。祇だ情生ずれば智隔り、想變ずれば體殊なるが爲に、所以に三界に輪廻して種々の苦を受く。若し山僧が見處に約せば、甚深ならずといふこと無く、解脫せずといふことなし。道流心法無形、十方に通貫して眼に在ては見といひ、耳に在ては聞といひ、鼻に在ては香を嗅ぎ、口に在ては談論し、手に在ては執捉し、足に在ては運奔す。本是れ一精明、分て六和合と爲る。一心既に無なれば、隨處に解脫す。——慧照禪師語錄

と敎へた。苦中から解脫するに、吾より外の力を假るに及ばず、わが此の心の中

に就て一切の迷ひを去ればそれで宜い。此の『隨處に解脫す』といふ點にその特色が存するのである。

釋尊の敎へは經律等によつて吾々に傳はつて居る。しかし其の經の文字は釋尊の敎へを傳へる爲に假り用ゐたものであるから、文字に囚はれては其の本意を失ふ。獨り文字のみならず、悟道の方法として貴ばるゝ事でも凡てさうである、之に囚はれては眞の悟りは得られぬ。それ等はすべて月を指す指のやうなものであるから、月を認めて後に指の用は無い。若し指のみを見て居れば、いつ迄も月は見られぬ。眞の敎へは佛の心から吾々の心に直ちに傳へらるゝより外は無いといふので、禪宗では敎外別傳、不立文字といふのである。

傳法の諸祖、初め三藏の敎乘を以て兼行す。後達磨祖師、心印を單傳し執を破し宗を顯はす。所謂敎外別傳、不立文字、直指人心、見性成佛なり。然れども不立文字に意を失ふ者多し、往々に謂ふ、文字を屏去し、默坐を以て禪と爲すと。斯れ實に吾が門の啞羊のみ。且萬法紛然、何ぞたゞ文字のみ不立なる者ならんや。殊に知らず、道とは猶ほ通の如し、豈に一隅に拘執せんや。故に文字に卽すれば、文字も不可得なり。文字旣に爾り、餘法も亦然り。見性成佛たる所以なり。——祖庭事苑

とあるに依て其の意は明である。而して此の不立文字の敎へは、最初に釋尊より迦葉に傳はつたとの事である。

世尊昔し靈山會上に在て、花を拈して衆に示す。是の時に衆皆默然たり。惟だ迦葉尊者のみ破顏微笑す。世尊云く、吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門有り、不立文字、敎外別傳、摩訶迦葉に付屬すと。——無門關

とあるもの卽ち是である。斯の如き敎へが萬事形式づくめの煩瑣な生活をして居た平安朝時代に傳はつて、世に流布しなかつたのは怪むに足らぬ。

今行はれて居る禪は臨濟宗と曹洞宗と黃檗宗の三派であるが、此內黃檗宗は

榮西禪師と臨濟宗

承應二年（德川家綱將軍の時）に明の隱元禪師の來て傳へたもので、鎌倉時代に傳はつたのは前の二派である。而して臨濟宗は榮西禪師によつて傳へられ、曹洞宗は道元禪師によつて傳へられた。二人共に元は天台宗の僧である。叡山に傳敎大師の本意を失つたことは前に云つたが、それでも此の山が本邦の思想界に於ての地位は、他の何者も之を爭ふことは出來ぬ。空也も、法然も、親鸞も、榮西も、道元も皆此處から出たのである。その後に至て日蓮上人も此處に學んで、得る所が最も多かつたのである。實に叡山は日本の思想史上に特殊の光彩を放つ山である。

榮西禪師は十四歲から叡山に學び、仁安三年二十八歲にして入宋した。支那に航して法を求めるといふことは二百年來絕えたことなのを、禪師によつて再興されたのである。支那から更に印度に入る志があつたが果さず、半歲にして歸朝した。文治三年四十七歲にして再び入宋し、建久二年五十一歲にして歸朝し、臨濟の禪を傳へた。彼の法然上人の開宗より二十七年の後で、賴朝が鎌倉に覇府を開いてより七年の後である。それより十一年の後、建仁二年に至り將軍賴家の歸依を得て京都に建仁寺を建て、建保三年七十五歲で寂するまで盛に佛心宗を唱へ、大に武家の歸依を得た。

道元禪師と曹洞宗

道元禪師は榮西よりは五十九歲の年少である。叡山、三井寺等に學んだが建仁寺に榮西に謁して大なる感化を受け、禪を究めやうと志を決した。貞應二年二十四歲にして入宋し、支那に在ること六年、曹洞第十四世の正統を嗣ぎ、安貞二年に歸朝した。これは榮西が臨濟の禪を傳へてより三十七年後、その入寂後十三年のことである。京鎌倉の人々の歸依を得て名聲忽ち世に高くなつたが、却て悟道の妨げとして之を厭ひ、波多野義重の招きに應じて越前に赴いたのは其の四十五歲の時である。後嵯峨天皇深く其の操行を嘉したまひ紫衣を賜はつたが、道元は厚く恩を謝して之を受けたまゝ、終身一度も之を身に着けなかつ

た。其の示寂は建長五年で、五十四歳であつた。

斯く非凡な人物が前後相踵いで出て、其の時代の要求に應すべき教へを世に傳へたのである。忽ちにして世間を聳動するほどの勢力を作り成したのは怪むに足らぬ。鎌倉にも京にも禪刹が相續いで建てられ、禪家に於て殊に重んずる楞嚴經と圓覺經とが常に講ぜられ、執權を始め有力なる武家が入道する者も次第に多くなつて來た。卽ち王朝時代に弘まつた八宗に、新しく起つた二宗を加へて、都合十宗といふものが日蓮上人立宗の頃に竝び存して居たのである。しかし眞に宗敎として勢力のあるものは、新しく興つた二宗と、舊く存する眞言宗とである。それに一たび廢つた律宗がまた復興されて、都合四宗が有力なものとして數へられたのである。

4、日蓮上人當時の佛敎

玆に一の疑問とすべきは、親鸞上人に依て創められた淨土眞宗に就て、日蓮

上人の遺文中に一言も見えて居らぬことである。親鸞上人の開宗は元仁元年といふことであるから、道元禪師の歸朝よりは四年前で、日蓮上人の立宗に先だつこと二十九年である。然るに日蓮上人は之に對して何等の批評も下さぬのみならず、親鸞といふ名さへも其の遺文中には見えぬのである。

親鸞上人は承安三年に生れ、弘長二年に九十歳を以て寂したのであるから、日蓮上人よりは四十九歳の年長である。九歳にして出家し、叡山南都に研鑽を積み、建仁元年二十九歳にして法然上人の弟子となつた。其の新に淨土眞宗を開いたのは五十二歳の時である。而して嘉禎元年六十三歳の秋から、示寂の時までは京都に居住したのである。されば日蓮上人が叡山遊學中は、京都に居たわけであるが、上人が其の說を叩いたといふことも無いやうである。然らば其の敎へは師の法然以外に一歩も出ぬかといふに、決してさうでは無い。勿論其の敎へに淨土眞宗と名けたのも、師の法然の眞意を發揮する積りであつたに相

違なく、師を頌して

本師源空世にいでゝ　弘願の一乘ひろめつゝ
日本一州ことゝ〳〵く　淨土の機緣あらはれぬ
智慧光のちからより　本師源空あらはれて
淨土眞宗をひらきつゝ　選擇本願のべたまふ
善導源信すゝむとも　本師源空ひろめずば
片州濁世のともがらは　いかでか眞宗をさとらまし——七高僧和讃

といひ、また自分の弟子に對して、

親鸞に於てはたゞ念佛して彌陀にたすけられ參らすべしと、よき人の仰せをかうぶりて信ずるよりほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土に生るるためにやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。——歎異鈔

と云つた所を見れば、たゞ法然を祖述するだけの志と思はれる。しかし之を局外から見れば、法然上人の說と同じとはいはれぬ。

法然上人の教へた所は、一心に阿彌陀佛を賴んで極樂往生を期せよといふことであるが、親鸞上人のいふ所によると、

法爾といふは如來の御誓ひなるが故にしからしむるを法爾といふ。この法爾は御誓ひなりける故に、すべて行者のはからひなきを以て、この故に他力には、義なきを義とすと知るべきなり。自然といふは、もとより然らしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とたのませ給ひて、むかへんと計らはせ給ひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんとも思はぬを、自然とはまふすぞと聞きてさふらふ。——和讃後書

とある。阿彌陀佛を賴む心の起るのも、自分で起すのでは無く、阿彌陀佛の計

らひであるといふのである。されば吾々はたゞ之に對して感謝してさへ居れば宜いので、決して極樂往生したいなどと吾から思ひ定めるには及ばぬことである。斯る敎へこそ眞に純他力の敎へといふべきもので、

念佛まうし候へども、踊躍歡喜の心おろそかに候こと、また急ぎ淨土へ參りたき心の候はぬは、いかにと候べきことにて候やらむと申入れて候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おなじ心にてありけり。よく〳〵案じ見れば、天におどり地におどる程によろこぶべき事をよろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひ給ふべきなり。よろこぶべき心をおさへて、よろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねて知ろしめして、煩惱具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が爲なりけりと知られて、いよ〳〵頼もしくおぼゆるなり。――歎異鈔

といふやうな極端の所まで、此の思想が發展して行つたものである。

斯る特色を有する敎へであるが、其の頃には未だあまり有力なもので無かつたのであらう。若しそれが世間の人に大なる影響を及ぼす程に有力なものであつたなら、日蓮上人が之に對して一言の批評も下さずに過された筈は無い。華嚴宗の凝然が著はした『八宗綱要』は文永五年の作であつて、其の末に八宗以外に言及し、禪宗に就ては『日本諸處盛に以て弘傳す』とあり、淨土宗に就ては『日本近代已來、此敎特に盛なり』と云つてある。而して淨土眞宗のことには一言も及んで無い。彼此思ひ合せて見るに、淨土眞宗は當時に於て未だ注意すべき程の地位を占めて居なかつたものであらう。

されば日蓮上人は其の立宗に先だつて舊く傳はつた八宗と、新に興つた二宗と、都合十宗の敎義を研究せられたのである。其中で最も勢力のあつたのは念佛で、これは上下一般に行亘つて居た。次では禪宗で、これは主として武士の間に勢力があつた。其の中に介在して眞言宗も亦相當な勢力を維持して居た。

然るに當時に聲望の高かつた極樂寺の良觀が、久しく世に廢れてゐた律宗を再興したので、これも侮るべからざる勢力となつた。斯くして日蓮上人は法華經を弘通せんが爲に、此等四宗に對して折伏を加へなければならぬことになつたのである。世に名高い四個格言は此等四宗に對する折伏であるが、獨り四宗だけを折伏されたのでは無い、四宗を凡ての宗の代表と見做して之を折伏されたのである。また此の四宗の中で律宗は奈良朝に傳はり、眞言宗は平安朝に傳はり、淨土宗は平氏の盛時に起り、禪宗は鎌倉時代に傳はつた。四宗が自ら四の時代を代表することにもなつて居る。

斯く十宗以上世に流布した宗派はあるが、其の多くは支那から傳はつたもので、日本に於て新に興つたものと云つては、法然上人の淨土宗と親鸞上人の淨土眞宗と、日蓮上人の敎へとの三つだけである。而して日蓮上人は之に殿するものと云つて宜いのである。尤も日蓮上人以後に一遍上人の創めた時宗といふものがある。これは建治元年に創められたものであるから、日蓮上人の立宗より二十二年の後である。一遍上人は初め天台宗の僧であつたが後に西山派（淨土宗の一派で、法然上人の弟子證空を祖とす）の聖達の敎へを受けて、念佛を世に弘めやうとの志を立てた。その時宗といふは『六時往生宗』といふの略稱である。善導の往生禮讃に基き、晝夜六時に念佛して往生を期するの意である。其の立宗の時は三十七歳で、十五年間諸國を遍歷して敎を弘め、正應二年に五十一歳で寂した。是は要するに念佛宗の一分派と見做して宜いものであるから、思想發展の徑路を追うて見れば、日蓮上人の敎へより以前のものゝ中に共に含めて見るべきである。

以上に叙述したやうな順序で、佛敎各派が發展して來た後に出て、法華經の行者として立たれたのであるから、日蓮上人は其等凡ての敎相を、五綱を立て嚴しく判釋し、以て其の宗旨を立つべき根柢を定められたのである。

5、五綱の一、教

先づ知るべきは釋尊一代の教の中に就て、何れを擇んで永く吾々の奉ずべき教とすべきか、その教の中に如何なる區別があるか、如何なる關係があるか等の事である。此等の點が不明であつては、たとへ自ら善として擇んだものでも永久に善として奉ずることが出來るかどうか、頗る心許ないことになる。

教の淺深を知らざれば、理の淺深を辨ふる者無し。——開目鈔

といふは、一言にしてよく之を悉したものである。さて教といふ中に自ら二つの別がある。『何を教へるか』また『如何に教へるか』である。前者は『化法』と呼ばれ、後者は『化儀』と呼ばれる。化法に四あり、化儀に四あり、之を併せて八教と呼ぶのである。化法に藏、通、別、圓の四教があり、化儀に頓、漸、秘密、不定の四教があり、合せて八教となる。

化法と化儀

先づ化法の四教から述べる、それには四諦といふことから知らなければならぬ。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦の四をいふのである。諦とは卽ち『審實不虛』といふ義であつて、佛が人生の有樣を達觀して、斯うと見究められた所をいふものである。先づ人生は如何なるものかといへば苦に充ちたものである。人々皆煩惱がある故に、その煩惱によつて其の果報を受けたのである。斯く見究めたのが苦諦である。此の苦は煩惱の働きによつて集めて造つたのであると苦の成立ちを見究めたのが集諦である。其の惱煩を滅し盡した所は眞の安樂地で、これを涅槃ともいふ。此の安樂地の狀態を見究めたのが滅諦である。然らば如何して煩惱を滅すべきかといへば道に依らなければならぬ。その道を修むることを明にしたのが道諦である。

煩惱を去らうとするには煩惱の何物なるかを知らなければならぬ。病性を知らずに治療を加へることの出來ぬやうなものである。煩惱は細く分てば八萬四千にもなるといふが、大別して三となる。之を名けて三惑といふ。卽ち一に見

四諦

三惑

思惑、二に塵沙惑、三に無明惑である。その一の見思惑といふのが又見惑と思惑とに分れる。見惑とは吾々が凡ての事物を觀察考量するのに、中正を得ぬことである。思惑とは更に其の事物に處するに就て生ずる惑ひである。此多くの見惑の元となるものは、十使である。使とは吾々の心を驅使して彷徨せしむるの謂である。十使とは、

一、身見　我が身が有ると思ひ込んで、假に有るものとは知らぬ、これを我見ともいふ。

二、邊見　死ねば我が身が全く無くなると思ふは斷無の見である。いつ迄も我が身があると思ふは常見である。共に中正では無い、邊見である。

三、見取見　自分の勝手から劣を勝と視て之に執すること。

四、戒取見　因ならざるを因と思ひ、道ならざるを道と思ふこと。

五、邪見　因果の道理を顧みぬ、誤つた見。

以上の五を五利使といふ。

六、貪　凡ての物を己の爲に有ると思ふ。

七、瞋　己に違ふものに對して瞋る。

八、癡　五見によつて苦を生ずることを知らぬこと。

九、慢　我のみ解し得たりとして自ら高くする。

十、疑　猶豫して決することが出來ぬこと。

以上の五を五鈍使といふ。

此の十使が種々に配合されて、種々無量の見惑を生ずるのである。次に思惑といふは斯る誤つたる見よりして誤つたる情慾を起すので、『分別を見といひ、貪愛を思といふ』との說明が簡にして之を悉してゐる。是も貪瞋癡慢等が元になつて種々の情慾が紛糾して起つて來るのである。此の見思惑は凡夫の惑である。

一般の人は此の見思惑によつて常に苦中に浮沈して居るのであるが、更に進

塵沙惑

んで他を教化すべき程の地位、例へば菩薩になつても全く惑を斷じ盡したとは限らぬ。次に擧げた二惑の爲に惱まされることが少く無い。塵沙惑は化導障と稱し、次の無明惑と共に別惑といふ。彼の見思惑は凡ての人に通ずる惑なるにより通惑と稱するが、これは特殊の人の惑である故に別惑といふのである。苟も人を教化して誤り無からしめやうとするには自ら無量無數の法門に通じて居なければならぬ。その無量無數なるを塵沙に喩へるのである。然るに智慧の劣れる爲に、此の無數の事を一々思ひ辨へ得ずして、錯誤を生じ顚倒を起すので、之を塵沙惑といふ。

無明惑

無明惑といふは障中道の惑ともいふので、吾々凡夫に在ては斯る惑のあることさへ思ひ當ることが無い。此の惑を斷じ盡せば佛になれるのである。即ち種種の法門にも通じ、智慧も甚だ明になつてゐるが、實相を究め盡すに就てなほ障蔽があるので、根本無明といふべきものである。之に比べて前の見思惑中の癡といふは、枝末無明である。吾々に取ては先づ何よりも見思惑を除くことの工夫が重要である。

四種の四諦

既に煩惑によつて種々の苦を生ずることを知る上は、之を滅する道を講じなければならぬ。これ佛が四諦を立てられたる所以である。しかし四諦を立つるに就て其の立て方が決して一樣で無く、淺深の別がある故に、隨て其の教に高下の別を生ずるのである。即ち四種の四諦がある、生滅の四諦、無生の四諦、無量の四諦、無作の四諦等である。

一、生滅の四諦とは因緣によつて實の生滅ありと見、之を離れて涅槃を得べき道を教へるために四諦を立てるのである。

二、無生の四諦とは生といひ滅といふも共に實ならず、本來自空である故に不生不滅であるといふ立場で四諦を立てるのである。

三、無量の四諦とは苦の中にも無量の相あり、道の中にも無量の別ありと、

一々之を分別して四諦を立てるのである。

四、無作の四諦とは生滅等を生ずる根本の理を捉へて、特に苦を滅するなどの造作を要せず涅槃に到達せしむる教である。

斯く四種の四諦を立てる所から、自ら四種の教が成立つ。即ち生滅の四諦は藏教である、無生の四諦は通教である、無量の四諦は別教である、無作の四諦は圓教である。

藏通別圓の四教

藏教とは、具さにいへば三藏教である。三藏とは經律論の三つで、それが皆整つて居る故に三藏教といふ。是は因緣によつて生滅ある人生の有様を示して、その累ひを脱すべき道を示すのが主である。之を小乘の法といひ、聲聞緣覺を主として教へるものである。次に通教とは大乘の初門である。前の藏教と次の別圓との中に挾まつて何れにも通ずる故に通教といふ、是は主として諸法は本來空なることを教へるものである。第三の別教とは菩薩に教へる特別の教である故に別教といふ。即ち最も多くの包容を有するものである。終りに圓教とは事理圓妙と云つて、事中に理あり、理中に事を容れ、萬有を統一する根本の妙用を明にする教で、佛の眞意がこゝに現はれ、眞の大乘教といふべきものである。此の四種の教が種々に配合せられて、釋尊の一代五十年の說法の內容を成すのである。

三觀と三諦と三智

此の圓教の理を覺るためには、種々の方法が立てられてあつて、天台は之が爲に三觀を修することを教へた。三觀とは空觀、假觀、中觀である。一切の差別は本來空であると觀るのが空觀である。其の差別が宛然として少しも亂れず存するさまを觀ずるのが假觀である。此の兩觀を統一して、事物一切の眞相を觀ずるのが中觀である。三觀を修して見究めた所の理が即ち空假中の三諦である。而して三諦といふものが各別箇に存するのでは固より無く、それは立場を變へて一つの物を見たのであつて、眞理は固より唯一なるべきである故に、三

頓漸秘密不定の四教

化法と化儀

諦卽一といふのである。空諦を覺り得れば一切智を成じ、假諦を覺り得れば道種智を成じ、中諦を覺り得れば一切種智を成ずる。更に之を前にあげた三惑に對して見ると一切智を具へた者には見思惑無く、道種智を具へた者には塵沙惑無く、一切種智を具へた者には無明惑が無いのである。一切種智を具へれば勿論前の二智も其中に含まれる。

以上化法の四教を概說したが、次には化儀の四教である。一に頓教とは漸を追うて導くので無く、初めから大乘を說く教へ方をいふのである。漸教とは小より大、淺より深と漸を追うて導いて行く教へ方である。秘密教とは共に聽く人人が互ひに相知らずして、各會得をするやうな教へ方である。不定教とは共に聽きながら、其人其人によつて得る所の同じからぬやうな教へ方である。化法の四教は譬へば藥味の異るやうなものである。化儀の四教は譬へば其の調合法の異るやうなものである。聽く人により、場合によつて、適當なる藥味を適當

一代五時

なる調合法によつて與へたのが釋尊一代の說法である。而して其の凡ての藥の中から、末世の凡ての迷へる者を醫すべき藥を製出されたのが法華經の教である故に『是好良藥』といひ、『擣き篩ひ和合して』作つたといひ、『差えずと憂ふること勿れ』と壽量品の中に繰返して云つてあるのである。

さて此の八教が釋尊の一代に如何に配合せられ、如何に用ゐられたかを見なければならぬ。天台大師は一切經を精讀して釋尊の一代を五時に分け、また五部、五味等の分ちを立てた。其の五時といふは華嚴の時、阿含の時、方等の時、般若の時、法華涅槃の時である。

一、華嚴といふは華を以て莊嚴するの意で、華とは佛の具へたる萬德をいふのである。卽ち此の華を以て莊嚴せられたる佛身の貴きさまを說き示すのである。是は大乘教であつて、華嚴宗で奉ずる所のものである。

二、阿含とは譯して法歸といふ、萬法此に歸して漏るゝ無きの意である。其

の説かれた場所によつて鹿苑とも呼ぶ。是は凡ての小乘の教を含む。俱舎宗、成實宗（共に今はなし）律宗の教義は此下に屬する。

三、方等の方といふは廣いといふ義、等といふは均しいといふ義である。藏通別圓四種の教を共に説いて、如何なる機根の者をも益せられた故の名である。これは大乘教であつて、深密經、楞伽經、楞嚴經、金剛頂經、大日經、蘇悉地經、淨土の三部經などは皆此時に於て説かれたのであるから、多くの大乘の宗に於て奉ずる教義は此下に屬するのである。

四、般若とは智慧の義である、佛の智慧を以て諸法皆空の理を觀じたことを説き示されたものである。大品般若經は此時に説かれたので、之によつて立つのは三論宗であるが今は亡びた。

五、法華涅槃といふ中に、勿論法華が主である。

以上一代五時といふ。さて特に辯ずるまでも無いことであるが、釋尊が最初華

嚴を説かれたけれども、あまり高尚で解する者が無かつた故に、更に改めて小乘教から説き初めて漸次に深きに入られたといふ説がある。是は佛の智慧を卑く考へた俗説たることといふ迄もない。先づ大乘を説き、次に小乘から漸く深きに入り、終に實大乘に歸着した所に深い意味を認めなければならぬことである。

こゝで涅槃經に就て少しく言ひ添へて置きたい。涅槃とは譯して滅といふ、卽ちこれは釋尊の入滅に先つて敎へられた所を錄したるものである。涅槃經の譯本には數種あるが、其の完全なものは大般涅槃經である。北凉の曇無讖の譯した四十卷を北本といふ。更に之を宋（六朝時代の宋、劉氏）の慧觀が再治して三十六卷としたのを南本といふ。天台宗の章安大師が疏を書いたのは此の南本である。されば羅什三藏の法華經の譯とあまり多く隔つては居らぬ。此の涅槃經に於て説き示された所は佛身の不滅なることである。元來涅槃といふ語の意味は滅といふことであるが、その滅といふに更に深い意がある。滅するとは

生滅の變化を滅するのである。卽ち不滅なるものを捉へることである。而もこれは生死を離れて別に求めるには及ばぬものである。

小乘の涅槃は生死を滅して涅槃なり、大乘の涅槃は生死本來涅槃なり。――法華玄論

とある如く、生死の中に涅槃を認め得る所が卽ち眞の覺りである。章安大師が涅槃經の疏を書いたわけは、涅槃經が法華經の意を更に敷衍したものであるといふ見地からである。日蓮上人が涅槃經の中のことを常に引用せられるのも同じ意に出るものである。

此の五時に配して五部を分つのである。五部とは兼但對帶と純との五である華嚴は別教と圓教とを兼ぬる故に兼といふ。阿含はたゞ藏教のみである故に但といふ。方等は四教共にある故に對といふ。般若は通別の二教を帶して圓を說くものである故に帶といふ。法華は專ら圓教である故に純といふ。

次に五味といふのは、涅槃經の中に牛乳を本にして酒を作ることが出て居るのに基いたものである。牛乳を精製して酪味を作り、酪味を精製して生蘇味を作り、生蘇味を精製して熟蘇味を作り、熟蘇味を精製して醍醐を作る。之を五時の順に配して來て、法華を醍醐味と定めるのである。

何れの經にもせよ此等の標準を以て判ずれば、其の一代聖教中に於ける地位は明に分るのである。藏教のみを說いてあれば阿含部に屬すべく、別圓を兼て說いてあれば華嚴部に屬すべく、藏通別圓の四教に亘つた內容ならば方等部に屬すべく、圓にして通別を帶ぶるものならば般若部に屬すべきである。而して純圓なるものは釋尊が正直に方便を捨て無上道を說かれた法華經に於てのみ見らるべきものである。又化儀の四教に就て考へると、華嚴は頓教であつて、阿含、方等、般若はいづれも漸教である。而して秘密不定の二教は、いづれの中にも含まれて居る。法華經は凡て此等を超越してゐる。但し超越とは此等の外

三種教相

に立つことで無い、此等の上に立つて其の凡てを包容することである。

斯く五時八教の別を立てゝ見る時は、一代聖教中に於ける法華經の地位が自ら明になるが、なほ深く立入つて諸經と法華經、法華經中の迹門と本門等の關係を明にし、其の歸着する所を定める爲に三樣の標準を立てゝ見る。卽ち三種教相といふのがそれである。三種教相とは、一に根性の融不融を判じ、二に化導の始終不始終を判じ、三に師弟の遠近不遠近を判ずることで、漸を追うて淺きより深きに入るのである。

根性の融不融

第一に根性の融不融といふは、教を聽く者の根性と教へらるべき本法とが能く相融和して居るか居ないかを別つのである。若しこれが融和して居れば、教へる佛の眞意が直ちに教へられる者の心に分る筈である。然るに佛が方便を用ゐられたのは未だ根性が融するに至らぬ故に、漸々之を導いて來る必要を感ぜられた爲である。さて漸くにして根性の融するに至つた故に、方便を捨て眞實の事を說かれたのである。無量義經に『四十餘年未顯眞實』とあるは根性不融の爲である。法華經に『正直捨方便』とあるは根性の漸く融せるに依るのである。

化導の始終不始終

第二に化導の始終不始終といふは、佛の出世の本懷が何れに在るかを判ずるのである。何れの經の中にも貴い教へが示されてある、又此の經に示す所が殊に重要であるといふ意味のことが述べられてある。しかし其等の凡ての教へが畢竟何の爲であるかを明にしなければ、佛の世に出られた目的は分らぬ。法華經に至り初めて、今までの教へは諸法の實相を示すといふ一の目的の爲であること、又是は釋尊の一代五十年の說法の目的であるのみならず、過去の諸佛も未來の諸佛も、盡く同じ目的の爲に法を說くのであると明された。斯くして化導の始終が初めて明になつたのである。

師弟の遠近不遠近

第三のものは最も重要である。以上の二項は法華經の迹門だけで分ち得ることであるが、此の師弟の遠近不遠近といふことは本門の深意を辨へなければ分

ち得られぬものである。師とは釋尊、弟子とは在世より今末代の吾々に至るまで凡て其の教を奉ずる者をいふ。師たる釋尊は三十にして成道せられてから教を說きはじめ、弟子もその以後に出來たとすれば、師弟の緣は甚だ近い。然るに法華經壽量品に於て佛は久遠の佛であり、無始の昔から永恒の後まで常住に說法して居たまふことが明された。されば佛の教を聽く者は此世ではじめて師弟となつたので無く前世からの弟子であることも明になつた。佛が久遠の佛であるのみならず、弟子たる吾々も久遠である。其の說法が常住であるから、吾々の成佛すべき道は常に開かれて居るのである。然らざれば娑婆卽寂光土の說は空言となる。此の思想から推して行けば獨り佛教の統一が出來るのみならず世界の有らゆる教の統一が出來る。何故ならば如何なる教と雖も、此の常住の說法の一部分を成して居らぬものは無いのである。たゞ其の中には佛の眞意が充分に現はれて居ないものもあるから、其等が凡て此處に氣付いて、自分達の

教が存在して居る眞の目的に叶ふやうになりたいと望むことになれば、皆進んで本化の門下に來り歸すべきである。

各の經が別々であつては佛教の統一は出來ぬ、各の佛が別々であつては凡ての教の統一は出來ぬ。その凡てが兄弟であり親類緣者であると分つて、宗家の家長の下に睦み寄るといふ氣運が熟して來べきである。されば此の第三の教相が殊に重大な意味をもつて居るので、日蓮上人が

法華經を爾前と引向けて勝劣深淺を判ずるに、當分跨節の事三つの樣あり。

日蓮が法門は第三の法門也。世間に粗ぼ夢の如く一二をば申せども、第三をば申さず候。第三の法門は天台妙樂傳教も粗ぼ之を示せども、未だ事畢へず、所詮末法の今に讓り與へしなり。五五百歲は是也。——富木入道殿御返事

と申されたのは道理のある言である。廣宣流布の望みは之に依らずしては達し得られぬことである。

右に引いた文の中に當分跨節といふことがある、これは權實を分つに就て心得なければならぬ事である。權とは暫く用ゐて終に廢すことである、實とは永遠に變らぬことである。權も亦貴いものであるが、廢すべき時に至つたら速に廢さなければならぬ。然らば佛教中に於て何れが權であるかといへば、教の分ちでいへば藏通別の三教が權である、部の分ちでいへば華嚴、阿含、方等、般若の前四味が權である。前者は卽ち當分の判で、後者は卽ち跨節の判である。

藏通別圓の四教はそれ〴〵に特有の教理を具へてゐる、卽ち各當分の教理である。之によつて判ずれば藏通別の三教は權であつて、圓教は實である。然るに諸經は何れも種々の要素が混じて居るから、圓教を說いてあると云つても純圓では無い。そこで諸教に跨つて其の含まれたる要素を調べて見ると、華嚴にも方等にも般若にも圓教が含まれて居る。しかし圓ならぬものをも含んで居るから皆權教である。法華經のみは純乎として圓のみであるから是が卽ち實教である。而して前四味中に含まれた圓は法華の圓によつて統一せられる。卽ち前四味は法華の下に屬して之を輔佐する役に置かれる時に眞の生命を有することになる。妙樂大師は

應に知るべし、兩義卽ち待絕二妙と殊ならざることを。

當分は乃ち今經の相待の義邊を成し、跨節は卽ち今經の開權の義邊を成す。

——玄義釋籤

と云つた。法華經を他の經と相對して勝ると見るは相待妙である、他の經を統一するものとして勝ると見るが卽ち絕待妙である。

以上は權教と實教との勝劣である。次に實教なる法華經の中に於て本門と迹門を分つことは前の『法華經の分段』の章に於て之を述べた。本門壽量品は卽ち法華經の中心たるのみならず、一代聖教の中心を成すものである。斯樣に比べて來て、教に就ての取捨を定めやうとすると此處に五項が見出される。之を

五重相對

五重相對と呼ぶのである。

一、內外相對、佛敎と佛敎以外のものと相對すれば外を捨て內を取る。

二、大小相對、大乘と小乘と相對すれば小を捨て大を取る。

三、實權相對、實敎と權敎と相對すれば權を捨て實を取る。

四、本迹相對、本門と迹門と相對すれば迹を捨て本を取る。

五、種脫相對、下種と脫益と相對すれば脫を捨て種を取る。

下種といふは佛種を心に植えるのである、脫益とは成佛得脫の益である。釋尊の在世に於て與へられたる本門の敎へは、久遠以來成佛を得なかつたものに成佛得脫の益を與へたこと、經の中に見えたる如くである。然るにそれは過去の事である。末法に生れた吾々は更に自ら成佛を得べく種を下さなければならぬ。その種は壽量品の文底にある妙法蓮華經の五字である。（『法華經の分段』の章參照）故に日蓮上人は、

敎は二十八品なり、意は題目の五字なり。——日向記

と示された。更にまた

在世の本門と末法の初は一同に純圓なり。但し彼は脫此は種、彼は一品二半、此はたゞ題目の五字なり。——觀心本尊鈔

と申されたのは簡にして極めて明なる語である。なほ題目に就ては後の章に委しく述べる積りである。

6、五綱の二、機

敎は人の爲の敎である、人を離れて敎を談ずるは愚である。敎は藥である、病無ければ藥の要は無い。人皆聖賢ならば、敎を立つる要はない。されば敎に就ての選擇は、敎を受ける人に就ての研究と相俟てはじめて其の用を成すものである。如何なる敎へが此人に入るべきか、此人は如何なる敎へを要するかを考へて後敎へなければ、如何に貴い敎へでも效を奏することは無い。

佛法を弘むる人は必ず機根を知るべし。――教機時國鈔

とあつて、五綱の第二に機を數へてあるのは之が爲である。

『哲人は機を知り之を思に誠にす』と程正叔の言は大に味がある。法華經不輕品に出た不輕菩薩が迫害を與へる者共に對しても『我深く汝等を敬ふ』と云つて禮拜し、終に其の者共が信伏するに至つたといふも、畢竟不輕菩薩が對する者の機をよく知つて之に對せられたからである。火は乾けるに就き水は濕へるに就くといふが普通ではあるが、時としては正反對の性質の說を以て之に向ひ、嚴しく彼を碎破して正しきに入らしむることが必要である。所謂『毒鼓』である。

謗法の者に向ては、一向に法華經を說くべし、毒鼓の緣と成さんが爲也。例せば不輕菩薩の如し。――教機時國鈔

とあるは此の意である。一人一人に其の機根が異ふけれども、一時代を通觀すれば其の時代を通じての機根がある。之を見究めることが出來なければ世を導くことも時を濟ふことも出來ぬ。機を分類すれば種々あつて、一々之を列ねることは出來ぬが、種々の方便を以て敎へ導かなければならぬ機根のものは雜機であつて、直ちに根本的の敎へを學ぶべき機根のものは直機である。日蓮上人が末法の初を『純圓なり』と申されたのは其の直機たることを見究められたからである。直機といふ中にも此に順緣と逆緣がある。日蓮上人が開目鈔の中に、

直機と雜機

順緣と逆緣

我が一門の爲に記す、佗人は信ぜざれば逆緣なるべし。

と記されたが、一門には順緣であつて、信ぜざる他人には逆緣なのである。反對するといふのも一種の緣である。全く無關係では救ひやうが無い、反對すればその反對するのを緣にして之に呵責を加へて善に導くことが出來る。卽ち逆緣である。世間が非常に切迫して、人心が極めて險惡になり、正義も人道も無視するやうになつて來たのは、卽ち逆緣によつて救はるべき時に迫つたものである。

四悉檀

佛法に於て四悉檀といふものを立てるのは、要するに對する者の機に應じて能く之を導かんが爲である。悉檀とは法を說くに用ゐられる方法である。悉とは徧の義で檀とは梵語の『檀那』の略卽ち施の義である。徧く益を施すための方法である。其の四悉檀とは一に世界悉檀、二に爲人悉檀、三に對治悉檀、四に第一義悉檀をいふ。

一、世界悉檀とは衆生の根器淺薄なるに由て、佛が其の聞くを願ふやうな事を說いて次第に之を導き、歡喜の心を以て敎を聞かしむるをいふ。

二、爲人悉檀とは衆生の機器の大小、宿種の淺深を察し、其の宜きに應じて之が爲に說くをいふ。

三、對治悉檀とは衆生の心に有する病に應じて之を治すべき敎を與へ、その惑を去らしむることをいふ。

四、第一義悉檀とは衆生の善根已に熟すと思ふ時は、直ちに第一義を說いて

聖道を得悟せしむるをいふ。

此はいづれも人を導くのに必要な方法であるが、斯る方法にのみ依賴して居られぬやうな切迫した時機に於ては、直截に大膽に、たゞ誠意一つを以て根本的の事を說いて聽く者の覺醒を促すの途に出なければならぬ。之を名けて超悉檀といふ。日蓮上人が小町の辻に立て說法された時の態度の如きは、超悉檀の活きたる例である。

何故超悉檀に依らなければならぬかを明にするには、種熟脫の三益を知らなければならぬ。委しくいへば下種益、熟益、脫益の三である。下種とは田に種を播くこと、熟とはその種を成熟せしめて米とすること、脫とは其の米を收穫することである。吾々凡夫でも必ず佛に成り得るのであるが、それには上の三段を經なければならぬので、先づ第一に佛種を下さなければならぬ、其次に之を成熟せしむべき種々の道を取り、最後に成佛に至るのである。而して此の熟

下種の時

の時機に於ては四悉檀によつて種々に培養長育の方を立てることが必要であるが、下種と脱とに於ては超悉檀が當然である。

釋尊が法華經を說かれて、舍利弗以下の多くの弟子が成佛の授記を得たのは卽ち脫益である。舍利弗以下の人々は久遠の昔から釋尊と師弟であつて、疾くに下種を得て居たのが、種々の世を經る間に次第に成熟し、いよ〳〵收穫の時に近くなつたので、釋尊は之が爲に法華經を說いて終始を完うされたものである。然るに此の法華經は舍利弗等が爲のみで無い、末世の衆生の爲である。否末世の衆生の爲といふ意味が寧ろ重いのである。末世の衆生は已に佛種を絕つた者であるから、更に改めて下種をしなければならぬのである。此の機に應ずべきものは方便的の敎へで無く、『正直捨方便、但說無上道』といはれた一乘の法でなければならぬ。之を辨へるのが能く機を知る者である

但し佛種を絕つといふことに就て誤解があつてはならぬ。佛種を絕つと云つ

ても佛性が無くなつたことでは無い。如何なる人にも佛性は具はつてゐる、此の佛性は如何なる境遇に居り、如何なる變化を經やうとも無くなることは無い。それが無くなつたら、如何なる敎へを施したとて成佛などの出來やう筈は無い。しかし佛性が具はつて居るといふだけで、成佛が出來るといふ安心は與へられぬ。譬へば卵の白味や黃味が鳥になるのでは無く、鳥になるのは豆粒より小い俗に『眼』といふ部分であるが、その白味や黃味を取去つて溫めても、決して鳥になるものでは無い。佛性は此の『眼』の如きものである。これを性種といふ。此に敎と行といふ緣が加はつて、次第に發育して行き得べきものになる。これを乘種といふ。白味も黃味もついて殼の中に入つた一つの卵のやうなものである。されば世が末になつて、如何なる敎も用を爲さぬやうになり、所謂白法隱沒の時代、鬪諍堅固の時代に陷つては、乘種が全く傷けられてしまつて、宛ら火に燋つた種のやうになつて居るから、之を蘇生せしめる爲に特別の努力を要

するのである。下種とは卽ち此の乘種を作り立てゝ行く働きである。

但し作ると云つても無より有を生ずるのではなく、佛性は各人皆具有して居るのであるから、之を開發して活きたる種とする必要があるのである。此の目的に叶ふものは方便的の敎へで無く、最も根本的な最も有力な最も明白適確な敎へでなければならぬ。故に末世の機を知るものは必ず他經を措いて法華經に歸せなければならぬのである

機と時

7、五綱の三、時

法華經は末世の爲に說かれたといふ點から見ても、法華經の行者が時を知らなければならぬことは明である。時を知らずしては何事でも出來ぬが、就中敎を弘め世を濟はうとするに就ては、時を知ることが殊に肝要である。日蓮上人が

「佛法を學せん法は先づ時を習ふべし。

廣宣流布の時

と撰時鈔の劈頭に書かれたのは謂あることである。機は必ず時の中に於て現はれる。譬へば機は血液の如く、時は血管の如きものである。血液は必ず血管の中に盛られて流通巡環しなければならぬ。機は必ず時に於て現はれて、之に相應する敎へを要求するのである。

釋尊一代の說法は盡く貴いものであるが、時に應じて其の益を與へる上に輕重多少を生ずる。卽ち日蓮上人が

「小乘流布して得益あるべき時もあり、實敎流布して佛果を得べき時もあり。然るに正像二千年は小乘權大乘の流布の時なり。末法の始の五百年には純圓一實の法華經のみ廣宣流布の時なり。――如說修行鈔

と申された所以である。而して是は上人が獨斷的に定められたことで無く、法華經の文と大集經の文とを比べ合せて斯く見究められたのである。卽ち

佛眼をかつて時機をかんがへよ、佛日を用て國土をてらせ。――如說修行鈔

正像末三時

の言を實行されてのことである。法華經の中に其の流布すべき時を豫言して『後末世』といひ、『惡世末法時』といひ、『後五百歳』といつて有るのは既に屢々說いたことである。此の末世といひ後五百歳といふことの委しい說明は、之を大集經に求めなければならぬ。

先づ正像末の三時といふ區別がある。委しくいへば正法の世、像法の世、末法の世の三である。是は獨り釋尊に限らず何れの佛でも、その佛の說かれた法が正しくその意味を失はずに傳はる時代、卽ち正法の世と、その形ばかり殘つて精神の失はれた時代、卽ち像法の世とあるのである。而して釋尊はその最も後に出たまへる佛である故に、其の像法の世が終つて後は末法の世となつて、凡ての敎が皆隱沒してしまふのである。其の正法は一千年、像法は一千年、末法は萬年とある。更に此の正像末の中に於て五箇の五百年が區分せられるのである。第五の五百年卽ち最後の五百年であるから、五五百歳とも後五百歳とも

五五百歳

書いてある。日蓮上人の時から今の吾々の時まで皆此の末法の世の中である。

一、正法千年（第一の五百年、解脫堅固　第二の五百年、禪定堅固）

二、像法千年（第三の五百年、讀誦多聞堅固　第四の五百年、多造塔寺堅固）

三、末法萬年（第五の五百年、鬪諍堅固）

堅固といふは各その事が堅固に行はるゝ故に付した名である。第一の解脫堅固の世に於ては、人々よく佛の遺敎を實行して苦を離れることが出來るのである。第二の禪定堅固の世に於ては實行やゝ衰へて、種々の障りが起つて來る故に、慮を靜め心を練る工夫を主としてやるのである。第三の讀誦多聞堅固の時代となると、既に像法の世に入つて居るので、實行には益々疎くなり、種々の研究や解釋が專ら盛になり、互ひに多く聞き多く知るのを競ふやうになる。第四の多

造塔寺堅固の世となれば、人々が無形のことよりは有形に現はれたものに重きを置き、多く寺塔を造つて、それで功德を積まうとのみ志すに至るのである。斯くて正像の二法共に過ぎ、末法の世に入ての初の五百年は全く敎の力が無くなつて人々唯だ我意に募り、相諍ひ相鬪ふことにのみ專であつて濁惡の狀に陷るのである。又これを白法隱沒の世といふ。白とは正にたとへ黑とは邪に喩へる。白法隱沒とは正法が世に影を潛めてしまふことである。

白法隱沒

是は釋尊が豫言せられたことであるが、後に事實によつて調べて見ると少しも違はず適中して居るのである。多くの著述は讀誦多聞堅固の世に作られ、多くの寺塔は多造塔寺堅固の世に建立されたものである。殊に末法に入つて世態の險惡に赴くことは誰の眼にも明に見えてゐる、まことに白法隱沒の名に負かぬ。既に此の豫言が斯くまでに適中したのを見る上は、他の豫言、卽ち『後五百歲廣宣流布』の豫言の適中すべきとも之を信じなければならぬわけである。

豫言の適中

されば末法に出たものは大なる確信を以て法華經を持ち、また之を弘むべきである。

正法は一字一句なれども時機に叶ひぬれば必ず得道なるべし。千經萬論を習學すとも時機に相違すれば叶ふべからず。——佐渡御書

と思ひ定めて日蓮上人は奮起したのである。釋尊が特に末世の衆生の爲にと法華經を說かれたのは、實に其の洪大無邊なる慈悲に出るもので、涅槃經の中には此の心を述べて、

譬へば七子の父母平等ならざるに非ず、然かも病者に於て心則ち偏に重きが如し。

とある。父母が特に病める子の爲に心を碎くが如く、末世濁惡の世に生れる衆生に對しては佛の憐みも殊に深い故に最勝の經たる法華經をその爲に遺されたのである。此の大なる慈悲心を解する者は、誰も皆感奮すべき筈である。

時と教との關係

教へは藥であるから、病の輕重によつて異ふのが當然である。病の最も重いものには最も優れた靈藥を與へなければならぬ。而も最上の靈藥は病を治するのみならず、精氣を養ひ活力を增すの效がある。法華經が卽ちそれである。

此經は則ち爲れ閻浮提の人の病の良藥なり。——藥王品

とあるのは此意である。日蓮上人此の末世の有樣を述べて、

小乘經大乘經竝に法華經は、文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず。所謂病は重し藥は淺し、其時上行菩薩出現して妙法蓮華經の五字を一閻浮提の一切衆生に授くべし。——高橋入道殿御返事

と申されたのは、全く佛意に基くものである。實際世が次第に下るに隨て、教によつて人を導くことが次第に困難になるから、以前の困難の少かつた時のやうな教では世に弘まるべき力が無い。それ故五五百歲の順を追うて其の行はれた教を調べて見ると、正しく低きより高きに向ふの階段を示して居る。卽ち初

五百年、解脫堅固の世には小乘が世に弘まつて外道の法を打破つた。第二の五百年、禪定堅固の世には大乘が漸く隆興して小乘を排した。第三の五百年、讀誦多聞堅固の世には大乘が盛になつて互に論諍するに至つた。第四の五百年多造塔寺堅固の世になつて法華經迹門の教が漸く流布した。されば第五の五百年鬪諍堅固の世こそ法華經の本門の利益が世に顯はるべき順序である。

末世に及んで法が滅盡すべきことは『法滅盡經』などに依て見ても、まことに明に示されてある。されば苟も佛教を信ずる者で此の末世に對する考への無い者は無い。それで各宗の主張する所が自ら末世に對する用意を示して居る。末世の衆生の機根が下れることを本として難行道を去て易行道に入れと教へるものは淨土宗である。經律等に賴るとも其の效が無い、たゞ教外別傳不立文字の法によれと勸める者は禪宗である。釋迦如來の法は已に力を失はんとして居る是れ大日如來の特に說き遺された密教の興隆すべき時であるといふものは眞言

宗である。寧ろ戒律を持つて眼前の一々の事から改め匡して行くが、卽ち濁惡の世を濟ふ最善の途であると主張するものは律宗である。しかし何れも釋尊の本意の在る所を失つた者である。白法隱沒は悲むべきであるが、是れ却て法華經の大白法の興るべき序であると思へば失望するに及ばぬ。

日本國の當世は如來の滅後二千二百一十餘年、後五百歲に當て妙法蓮華經廣宣流布の時刻なり。――教機時國鈔

といふ確信あつて、初めて勇ましく此時に處し得べきである。

法華經第七に云く、我滅度後、後五百歲、廣宣流布於閻浮提、無令斷絕等云々。予一たびは歎いて云く、佛滅後既に二千二百二十餘年を隔つ、何なる罪業に依て佛の在世に生れず、正法の四依、像法の中の天台傳敎等にも値はざるやと。亦一たびは喜んで云く、何なる幸あつて後五百歲に生れて此の眞文を拜見することぞ。在世も無益なり、前四味の人は未だ法華經を聞かず。正像もまた由無し、南三北七竝に華嚴眞言等の學者は法華經を信ぜず。天台大師云く、後五百歲遠く妙道に沾はん等云々。廣宣流布の時を指すか。傳敎大師云く、正像稍過ぎ已て末法太だ近きに有り等云々。末法の始を願樂するの言なり。時代を以て果報を論ずれば、龍樹天親に超過し、天台傳敎にも勝るなり。――顯佛未來記

といふのが末世に生れた法華經の行者の抱負であり覺悟である。此事さへ忘れなければ如何なる艱難をも突破して行ける筈である。

8、五綱の四、國

敎は人を導くための敎である、人は必ず國を作つて生存する。國を考へずして敎を立てることの出來ぬのは明なることである。國のために力を盡すこと無しに、世界の爲に力を盡し得るやうに思ふのは空想である。譬へば人には皆言語がある。その言語は日本語とか、支那語とか、英語とか、佛語とかである。

國の爲と世界の爲

その何れでも無い、人としての言語などといふものは存在しない。將來世界共通の言語が出來やうとも、それは必ず現在の日本語とか英語とかいふものが元となつて發達したもので無ければならぬ、世界語が天から降つて來るものでは無い。道理はそれと同じことで、各人皆國を成して住んで居ながら其の國に盡すこと無しに、直ちに世界の爲に盡すことなどの出來やう道理は無い。

「日蓮生を此土に得、豈に吾國を思はざらんや。――一昨日御書

といふは、たゞ此國に生れた緣故で此國の事を心にかけるといふやうな淺い意では無い。實際此國の柱とならずして世界を救ふことの出來やう筈が無いのである。

昔の希臘のストイック派の學者は殆んど國といふものを無視して、『吾は世界の民なり』と稱した。此の語の中には國運衰微の時代に生れた絕望的哀音を含んでゐる。されば同じストイックの思想が羅馬時代に復活して所謂羅馬克己派を作るに及んでは、國家の爲に力を盡すことが盛に奬勵された。近世に及んでは殊更、その國を無視して世界のために力を盡すの不可能なことが愈々明になつて來て居る。露西亞などには其國の爲に盡すよりも、世界民衆の爲に盡す方が高尙な事だといふ主張の上に立つた思想家、例へばトルストイのやうな人もあつて、其の敎へた所は確に多くの利益を世間に與へて居る。しかし是は健全な主張とはいはれぬ。若しトスルトイの樣に充分力量のある人が、眞に其國民を善導する爲に全力を注いだなら、その世間に與へる利益はモット偉大であつたに違ひない。今此の大戰爭の爲に世界の蒙つて居る慘害は非常なものだが、其の一方の獨逸が致命傷を受けて動けなくなる迄は此の慘害を止める途は立たぬ。然るに露西亞が瓦解の狀態に陷つた爲に、獨逸に致命傷を與へるといふ上に非常な障礙を來して居るのは明なことではないか。若し露西亞人に國民としての團結力を鞏固ならしむべき宗敎なり學說なりがあつて、其の國民の思想を

法華經流布の中心たる國

眞によく支配して居たなら、それが今世界の慘害を止め、世界の幸福を進める上にどれ程役に立つて居たか知れぬ。

教を以て世界の民を化すると云つても、其の教の流布の中心たるべき國が無くては、充分の力を以て流布することは出來ぬ。孔子が天下を巡遊して明主を求めたのも、マホメットが王國を打立てたのも志の存する所はこゝに在る。耶蘇教もコンスタンチン帝の歸依を得て、はじめて世界に弘まるべき基礎を作ることが出來た。しかし自分の國が果して斯の如き資格のある國であるか如何かを考へて見なければ、期待する所ばかり徒に大きくても仕方が無い。日蓮上人は

「國には寒國熱國貧國富國、中國邊國大國小國、一向偸盜國、一向殺生國、一向不孝國等之れ有り。又一向小乘の國、一向大乘の國、大小兼學の國も之れ有り。而るに日本國は一向に小乘の國か、一向に大乘の國か、大小兼學の國なるか能く能く之を勘ふ可し。――教機時國鈔

日本の國體

といひ、更に進んでは、

日本國は一向大乘の國なり、大乘の中にも法華經の國たる可きなり。――教機時國鈔

と斷言せられたが、是れ則ち最勝の經たる法華經の流布は最勝の國たる日本よりすべきことを確信せられてのことである。上人當時の日本國は實に淺ましい有樣であつたから、上人は之に對して屢々呵責を加へ、亡國であるとまで極言せられた。しかし病が重いのと體格の羸弱なのとは異ふ。別に病氣が無くても羸弱で長生きの出來ぬ人もある。重病に罹つても、體力のシッカリして居る人ならば、回復した後にはいくらでも働ける。『養生せぬと死ぬぞ』といふのは、死ぬのを望んでいふので無い、早く回復して達者で長生きするやうにさせたいからである。治亂、盛衰に如何なる變遷があらうとも、元來の國體に於て世界に冠絶したる日本國は、法華經流布の中心たるべき使命を負うて居るのである。

正義を以て立つ國

正義の上に立つて、世界に師として臨むことが建國の理想であつて、力を本として侵掠的發展をする國とは全く其の選を異にするものである。神武天皇御東征の際の詔に、天孫降臨以來のことを述べられて、

是の時に運鴻荒に屬し時草昧に鍾れり。故に蒙くして以て正を養ひて此の西偏を治す。皇祖皇考乃ち神に乃ち聖、慶を積み暉を重ね、多く年所を歷たり。――日本書記

とあるのは、實によく吾が國體を明にし給うたものである。『蒙くして以て正を養ひ』とあつて『以て力を養ひ』とも『以て勢を養ひ』とも無い。『慶を積み暉を重ね』とあつて、武力や財力を積むことも侵掠の勢を積むことも無い。發展には勿論武力も財力も必要であるが。それが根本では無いのである。掠侵主義や征服主義で無く、正を養つて其の正を世界に弘むべく、慶を積み暉を重ねて、其の慶を世界に頒ち其の暉を世界に光被せしむべき目的の爲に、武力をも財力をも用ゐるのが日本國の理想でなければならぬ。

我が日本國は一閻浮提の內、月氏漢土にもすぐれ八萬の國にも超えたる國ぞかし。……其上神は又第一天照太神、第二八幡大菩薩、第三は山王等の三千餘社晝夜に我が國を守り朝夕に國家を見そなはし給ふ。其上天照太神は內侍所と申す明鏡に影をうかべ、大內裏にあがめられ給ひ、八幡大菩薩は寶殿をすてゝ主上の頂を栖とし給ふと申す。――神國王御書

と日蓮上人の斷言せられたのは、たゞ吾が生れた國だから讃めるといふやうな卑い考へからでは無い。斯る國が法華經の流布を得て國民思想の根柢を固める時には、こゝに充分なる發展も出來、世界に敎化を及ぼすことも必ず出來る筈である。而して有力なる人々が心を協せて法華經を此國に弘めることに努力さへすれば、必ず弘まるに定まつてゐるといふ其の證據は、傳敎大師の前例に明である。

法華經流布の實例

像法の末八百年に相當て、傳敎大師和國に托生して、華嚴宗等六宗の邪義を糾明するのみにあらず、加之南岳天台も未だ弘め給はざる圓頓の戒壇を叡山に建立す。日本一州の學者一人も殘らず大師の門弟となる。――曾谷入道殿許御書

といふやうに盛なる有樣であつたのである。それは佛によつて法華經流布の時と定められたる末法の世に達せぬ時であつた。それでさへ此の有樣であつたのである。況して時既に至れる上は努力次第で必ず此國に法華經が流布するに定まつてゐる。彼の彌勒菩薩が『東方に小國有り、其中唯だ大乘の種姓のみ有り』と云つたのも、須梨耶蘇摩が『此の經典東北に緣有り』と云つたのも、安然和尙が『日本一州圓機純一』と云つたのも、斯くして皆空言で無かつたと定まるべきである。斯の努力は此の國の爲であつて、同時に此の敎の爲である、而して同時に世界の人の爲である。

9、五綱の五、序

最後に序といふことを考へなければならぬ、序とは卽ち『敎法流布の前後』である。世が如何に流轉變化しても、その變化の中を貫いて或る定まつたる順序が存することは否まれぬ。此の自然の順序に逆行しやうとしても、到底出來ぬことである。これは萬事に通じてさうであるが、就中思想の變遷は整然たる徑路を取つて動くものであつて、如何なる大思想家も之を無視して、たゞ自分の力を以て世を動すといふことは出來ぬ。

善く戰ふ者は之を勢に求めて人に責めず、故に能く人を擇びて勢に任ず。
――孫子

といふは戰爭にのみ限られたことで無い、世を敎化しやうとするには尤も此の自然の勢に意を用ゐなければならぬ。

最も善い敎を以て世を導かうといふ慈悲心は、敎法流布の前後次第に關する

佛法流布の前後

慎重なる注意と相俟つて、初めて世にも人にも益を與ふべきである。此の事は日蓮上人が

佛法を弘むる習ひ、必ず先に弘まりける法の樣を知るべきなり。例せば病人に藥を與ふるには、先に服したる藥の樣を知るべし。藥と藥とが往きあひ爭ひをなし、人を損ずる事のあるなり。先に外道の法の弘まれる國ならば、佛法を以て之を破るべし。佛の印度に出て外道を破り、摩騰迦竺法蘭の震旦に來て道士をせめ、上宮太子の和國に生れて守屋を切りしが如し。佛敎に於ても小乘の弘まれる國をば大乘をもつて破るべし、無著菩薩の世親の小乘を破りしが如し。權大乘の弘まれる國をば實大乘を以てこれを破るべし、天台智者の南三北七を破りしが如し。而るに日本國は天台眞言の二宗の弘まりて今に四百餘歲、比丘比丘尼優婆塞優婆夷の四衆、皆法華經の機と定まりぬ。

——南條兵衞七郎殿御書

一般の例

佛敎の例

と申されたのに能く悉されてある。凡ての宗敎の發展する順序を見るに、最初は人々が現世の危難を脫れるとか、現世の希望を充すとかいふ目的で宗敎を信ずる。それから進めば現世以外に自己の心を托すべき別の世界を求めて、こゝに永遠の生命を得やうとする。それが更に進展して、その永遠の生命は他より付與せられるので無く、各自にそれを具有するものであると氣付くやうになる。それから進んで終に眼前の事物をも未來永恒の問題をも、共に包容統一すべき敎を求めることになる。是れが自然の順序である。

佛敎の發展に就て考へても同じことである。佛敎の現はれる前の外道の敎にも隨分高遠なものはあるが、要するに外道は我を棄てることが出來ぬ、小い自己の欲望を離れることが出來ぬ。日蓮上人が

然れども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死を離れず。善師に仕へては二生三生に惡道に墮ち、惡師に仕へては順次生に惡道に墮つ、外道の所

詮は內道に入る卽最要なり。——開目鈔

と申された通りである。之を救ふべき爲に起つた佛敎は、最初に生死流轉の世を脫して寂靜平和の境界に入るべき敎、卽ち小乘の敎によつて世を化した。小乘は一人の解脫を敎へるのみで、一切衆生を子として視られた佛の大慈悲心に一致し得べき人を作ることが出來ぬから、小乘の後には大乘が之に代つて行はれる。大乘は菩薩の行を敎へるものである。其の大乘中にも方便の敎と眞實の敎とあるから、最後には諸法の實相を敎へたる一乘法、卽ち法華經の敎に歸さなければならぬのである。

日本國の例

日本一國に於ける流布の順序を見ても亦さうである。前の『日蓮上人以前の佛敎』の章に於て述べたやうに、現世利益を主として信仰された佛敎が廢れて來世を旨とする佛敎が起り、一轉して見性成佛を敎へる禪の流行となつた上は、自力と他力とを統一し、現世と來世とを一貫したる法華經の敎へが流布すべき運に向ふのが自然の順序である。

日蓮上人の一生

「像法一千年の內に入りぬれば、月氏の佛法漸く漢土日本に渡り來る。世尊眼前に藥王菩薩の迹化他方の大菩薩に法華經の半分、迹門十四品を讓り給ふ。これは又地涌の大菩薩末法の初に出現せさせ給ひて、本門壽量品の肝心たる南無妙法華經の五字を一閻浮提の一切衆生に唱へさせ給ふべき先序の爲なり。所謂迹門弘通の衆は南岳、天台、妙樂、傳敎等是なり。今の時は世すでに上行菩薩御出現の時刻に當れり。——下山御消息

とあるは實に動すべからざる言である。而して上人御一代の事蹟を見ても、先づ釋尊の眞意を明めんが爲に二十年の研究を積み、次に淸澄山上の朝日に對つて開宗を宣し、次に諸宗折伏の大奮鬪に從事し、次に其の上行菩薩の再誕たることが事實によつて證せらるゝに及んで、佐渡に在て本尊を圖顯し、最後に身延に隱栖して弟子檀那等を敎訓陶冶し、以て廣宣流布の基礎を定められたる、

實に本末終始一絲亂れざるものである。教を知り機を知り時を知り國を知り、教法流布の前後を知つたる上人の一代は、其儘に其の教義の實現として視るべきである。

10、攝受と折伏

攝受と折伏

既に五綱を立て教判を下し、末法の世の日本國には法華經より外に適したものは無いと見究め、之を弘めるのが卽ち佛弟子たるの責を果す唯一の途であると知つた上は、生命を惜まずして之を弘めなければならぬ。其の弘めるに就ての態度が二樣ある、所謂攝受と折伏とである。攝受とは我獨り正しく行つて他の自ら化するのを待つのである。折伏とは進んで他の誤りを匡し、吾と同じ道に入るまでは之に對する攻擊を止めぬのである。日蓮上人の取られた途は折伏である。獨り日蓮上人のみならず、天台にせよ、傳敎にせよ、法華經の行者は皆折伏をするのである。天台大師は『法華折伏破權門理』と云つた。

佛法は攝受折伏時によるべし、譬へば世間の文武兩道の如し。されば昔の大聖は時によりて法を行ず。雪山童子、薩埵王子は身を布施とせば法を敎へん、菩薩の行となるべしと責めしかば身を捨つ。肉をほしがらざる時、身を捨つべきか。紙なからん世には身の皮を紙とし、筆なからん時は骨を筆とすべし。破戒無戒を毀り持戒正法を用ゐん世には、諸戒を堅く持つべし。儒敎道敎を以て釋敎を制止せん日には、道安法師、惠遠法師、法道三藏等の如く王と論じて命を輕うすべし。釋敎の中に小乘大乘、權敎實敎雜亂して、明珠と瓦礫と牛驢の二乳を辨へざる時は、天台大師傳敎大師等の如く、大小權實顯密を强盛に分別すべし。——佐渡御書

とある通りで、是は法華經の行者として當然の態度である。自分さへ正しくして居れば宜いといふのは、小乘の徒のいふ事である。大乘の敎を信ずるものは共に菩薩としての行を積まなければならぬ。菩薩の行は、他に利益を與へるこ

如來の使

とに力を用ゐるに在る。今自ら正しいと信ずる事を、他の者が信ぜぬのを見て之に對して哀愍の念を生ぜぬならば、眞の佛弟子とはいはれぬ。迷へる者を哀愍するの念が强くなれば、いかにもして之を開悟せしめやうと努むる。卽ち是が折伏となるのである。殊に法華經を信ずる者は、

我が滅度の後、能く竊かに一人の爲にも、法華經の乃至一句を說かん。當に知るべし、是人は則ち如來の使なり。如來の所遣として、如來の事を行ずるなり。——法師品

と釋尊が仰せられた如く、釋尊の御使として世に出たといふ覺悟を以て事に當らなければならぬ。勿論自分が折伏の態度で出れば世間の迫害は加はるに極まつて居る。それに對して怨むの怒るのといふ情があつてはならぬ。卽ち如來の室に入り、如來の衣を著、如來の座に坐するの心でなければならぬのである。經には

不輕の二十四字

如來の室とは、一切衆生の中の大慈悲心是なり。如來の衣とは、柔和忍辱の心是なり。如來の座とは一切法空是なり。——法師品

とある。此の心無くして折伏を爲さうとするのは間違つて居る。日蓮上人は其の態度を自ら說明して、

乃往過去の威音王佛の像法に、大乘を知る者一人も無かりしに、不輕菩薩出現して敎主說き置き給ひし二十四字を、一切衆生に向て唱へしめしが如し。彼の二十四字を聞きし者は一人も無く亦た不輕大士に隨て益を得たり。是れ則ち前の聞法を下種とせし故なり。今も亦た是の如し。彼は像法、此は濁惡の末法、彼は初隨喜の行者、此は名字の凡夫、彼は二十四字の下種、此は唯五字なり。得道の時節異れりと雖も成佛の所詮は全體是れ同じかるべし。

——敎行證御書

と申された。此外にも自ら不輕菩薩の迹を追ふ志を述べられたことは度々であ

る。其の二十四字といふは、法華經不輕品に、

我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず。所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて當に作佛することを得べし。

とあるのが卽ち是である。折伏を加へるのは、其の人の具有せる佛性を重んずるが爲である。斯くも貴い佛性を具有しながら、菩薩の道に遠ざかつてゐる爲に、永く成佛に緣が無いのは如何にも悼ましいことである。故に之が爲に强烈なる折伏を加へて、覺醒せしめんことを努めるのである。世を憂へ人を憐むの念の熱烈なものは、誰も折伏的の態度に出づべきである。

夫れ豈に求むる有て而して爲さんや、道を信ずる篤うして自ら知る明なる者なり。——韓退之伯夷頌

とは眞に法華經の行者の爲の言である。若し名利の念に驅られ、求むる所あつて折伏を爲すならば、それは只の爭ひである、折伏などいふ貴い名を冒すべきものでは無い。

日蓮上人が諸宗を折伏するに當て發せられた、所謂四箇の格言『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊』といふは、古來甚だ有名なものであるが、是は決して此等四宗をのみ攻擊したのでは無い。末世に入つて法華經以外の敎を奉ずるものを盡く排擊せんが爲に、當時に人心を支配する勢力のあつた四宗を、凡ての代表者と見做して之に折伏を加へられたのである。四宗はまた其の日本國に弘まつた年代から考へて見ても、律宗は奈良朝に弘まり、眞言宗は平安朝に弘まり、念佛は平氏の盛時に起り、禪は鎌倉時代に始まり、自ら一時代づゝを代表して居る。而して日蓮上人が之に對して下された批判は、決して上人自已の獨斷では無く、經文に根據を置いての裁斷である。

所詮佛法を修行せんには人の言を用ゆべからず、只仰いで佛の金言をまもるべき也。——如說修行鈔

といふが卽ち其の精神である。四箇格言の根柢はたゞ『佛の金言を守る』といふ一事に在る。

先づ念佛宗に於ては聖道門と淨土門の二を立て、前者を難行道にして末世の機根に合はぬと排斥し、彌陀を念ずるより外の神佛を信ずるのを一切雜行として禁ずるのである。卽ち釋尊を拜することはならぬ、法華經を信ずることもならぬのである。然るに法華經に於ては、末世の衆生が成佛の直道は此より外に無いと明に示されてある。而して

若し人信ぜずして此經を毀謗せば則ち一切世間の佛種を斷ぜん。或は復た顰蹙して疑惑を懷かん、汝當に此人の罪報を說くを聽くべし。若しは佛の在世若しは滅度の後に、其れ斯の如き經典を誹謗すること有らん。經を讀誦し書持すること有らん者を見て輕賤憎嫉して結恨を懷かん。此人の罪報を汝今復た聽け。其人命終りて阿鼻獄に入らん。——譬諭品

と明言してある。此の經文に僞りが無いならば、念佛の徒は無間地獄に定まつたものである。

次に禪宗に於ては敎外別傳といひ不立文字といひ、佛の說かれた所を輕視して見性成佛を稱し、自力を恃むこと强くして佛の慈悲を仰ぎ尊ぶの念に乏しい。佛の所說に依らぬものは魔の眷族であると、涅槃經に示された所は、正しく斯る主張の上に立つ者の爲である。末世の者は法華經に依れと佛が敎へられたのにその慈悲を忝いとも思はないで、『別傳』などを立てるのは僭上の至である。

諸法の實相を除いて、餘殘の一切法は、盡く名けて魔と爲す。……何を以て魔と名くる。答へて曰く、慧命を奪ひ、道法の功德善本を壞る、是故に名けて魔と爲す。——智度論

といふ言さへある。佛の本意に適つた敎法を無用として壞り去るものは天魔といふの外はない。

眞言亡國

眞言宗に於ては顯教と密教とを別ち『諸經中王』と定められた法華經をも顯教の中であるとして下し、主師親の德を具へられた教主釋尊をも應身の劣佛とし（一體應身佛が劣るといふことは無い、その道理は次の章で說く）大日如來を法身の佛であると立て、其の說かれた所をのみ密教として尊ぶのである。弘法大師は法華經を大日經と華嚴經の下に置いて『第三戲論』と貶した。若し大日如來に比べて釋迦如來が劣るといふことが眞實ならば、法華經に於て釋迦如來が卽ち久遠の本佛であると說かれたのは僞になる。また觀普賢經に

釋迦牟尼佛をば毗盧遮那、遍一切と名け奉る。其佛の住處を常寂光と名く。

とあるのも僞になる。若し法華經が第三戲論であるなら、佛自ら之を『最爲第一』と明言せられたのは立たなくなる。斯る說は上下尊卑の分を亂るもので、此の思想が國中に瀰漫すれば、混亂壞頽の極、終に亡國となるより外は無い。日蓮上人は法華の道場たる叡山が密教の下に屈したのを慨いて

國また王と臣と諍論して、王は臣に隨ふべき序なり。一國亂れて他國に破らるべき序なり。——下山御消息

と申されたが、是は獨り一二の宗派のみの問題では無い。

最後に律宗は極樂寺の良觀が再興した所のもので、元來これは小乘の教である。戒を持つことが惡いといふ理は無いが、菩薩の行さへ積めば律に拘らずとも、自ら律を持つより以上の善行が出來る。律の末にのみ拘はつて、慈愛の心が根本に無ければ、徒に形式的な、煩瑣極まる事のみが世に行はれて、上下一致して眞の發展を策することは出來ぬ。法華經には此經を持つものを讃めて、

是の如きの人は諸佛の歎めたまふ所なり。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり。是を戒を持ち頭陀を行ずる者と名く。——寶塔品

とある。殺生戒は五戒の最初に出て居て、ことに嚴しく守らるべきものであるが、正法を護る爲には之を犯すも已むを得ぬ。されば、

五戒を受けざれども、正法を護るを爲すを乃ち大乘と名く。正法を護る者は當に刀劍器仗を執持すべし。刀杖を持すと雖も我是等を說きて、名けて持戒といはん。——涅槃經

とまで敎へられてある。末法の世の樣に適せぬ、消極的な戒律のみを重んじて、更に高き菩薩行を敎ふるものを沮止する者は、國の發展を妨ぐる所の賊である。

斯く四箇格言なるものは、法華經を佛の說の如くに行ずる上から、その時代に照して立てられたものである。されば折伏すべきもの必ずしも四宗と限つたことは無い。社會民心を蠹毒すべき不健全な思想に對しては、盡く折伏の大鐵椎を下すべきである。是れ則ち日蓮上人の志である。

一八　日蓮上人の宗旨

本尊と信念と實行

末法の世に入つて『妙法蓮華經の五字、一閻浮提に弘まらせ給ふべき瑞相に魁したり』といふが、卽ち日蓮上人の自ら許された所であつて、其の志を述べては、

1、一念三千

本門の本尊、妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に廣宣流布せしめん。——顯佛未來記

と云はれた。此の本尊に對して吾々の捧げる信念があり、又吾々日常生活の上に於ける此の信念に基く實行があつて、廣宣流布の實が初めて擧るのである。

三大秘法

故に日蓮上人の宗旨を知るには此の三點に就て知らなければならぬ。卽ちこゝに三つの重要なる法門が立つ。これ卽ち三大秘法といふものである。一に本門の本尊、二に本門の題目、三に本門の戒壇が是れである。

秘法とは秘密の法門といふことである。秘密とは深遠なこと、根本的なこと

三身佛

絶對なことである。秘密の字の基く所は法華經の壽量品である。法華經を讀んだ者は誰でも壽量品の中に『如來秘密神通之力』といふ最も重大な語のあることを知つてゐる筈である。天台大師は之を解釋して、

一身卽三身なるを名けて秘と爲し、三身卽一身なるを名けて密と爲す。又昔說かざる所なるを名けて秘と爲し、唯佛のみ自ら知ろしめすを名けて密と爲す。

——法華文句

と云つた。三身とは佛の三身である。佛の三身とは三種の佛があるといふことでは無く、一の佛が三方面から觀られて、各限り無く貴い姿を示して居ることである。卽ち一に法身佛、二に報身佛、三に應身佛、これを名けて三身といふ。法身佛とは實在として觀たる佛、報身佛とは智慧として觀たる佛、應身佛とは慈悲として觀たる佛である。而も此の佛は吾々と懸け隔つたものでは無く、實は吾々の心の底に斯る佛と異らぬ種は具はつて居るのである。

三身の現はれ方

應身佛

我等が己心の釋尊は五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛なり。

——觀心本尊鈔

と示された如くである。

三身卽一とはいふが、吾々が三身卽一と知るのは容易の事で無い。空に月があつて、その光りが地上の物を照すのである。しかし地上を只うつ向いて歩いて居る者は、空に月のあることに氣がつかぬ。その光りに照されて地上に吾が影の映るのを見て、はじめて心付いて空の月を仰ぐ。佛も亦その如くで、其の利益が吾々の身に及ぶを見て、はじめて吾々は佛のあることを知るのである。人生には固より苦惱が多い。吾々に思慮分別が發達するに伴つて、苦惱の度も亦加はつて來る。此の苦惱は吾々の力を以て取除くことの出來ぬものである故に、吾々は何等か偉大な力が加はつて、此の苦惱を除くべき途を開いて行きたいといふ望みを自然と懷くやうになる。斯る望みに應ずべく、佛の敎へといふ

ものが吾々に與へられるのである。而して其の敎へによつて吾々の心が化せられ、吾々の苦惱が取除かれる、これ則ち『拔苦與樂』の語ある所以である。斯くして吾々の心に現はれる佛は應身佛である。吾々の自然の要求に應じて、吾々を利益せらるゝ佛である。所謂應化益物の佛である。されば吾々の心に佛といふことが先づ深く刻まれるのは、其の洪大なる慈悲を知ることに依つてゞある。

既に慈悲の貴いことを知れば、その慈悲の由て來る所を知るやうになる。土に埋つた種が日に照されて芽を出すのを見れば、則ち日の恩の貴いことを知る。而して此の日の恩は其の光の中に含まれたる熱の力である。佛が洪大なる慈悲を施して、凡ての者の苦を除き樂を與へるのは、其の具有する無限の智慧の力によるものである。法華經の中で舍利弗は釋尊を讃めて『慧日大聖尊』と云つて居る。其の無限の智慧によつて知らざる所無く照さゞる所無き故に、凡ての

者に對してそれ〴〵の機根に應じ、それ〴〵の場合に應じた敎へを與へることも出來るのである。されば智慧無ければ慈悲が無いといふも過言ではない。しかし慈悲によつて初めて其の智慧が吾々に現はれるのであるから、たとへ佛自身に所謂『受用法樂』の智を具へて居られやうとも、慈悲として現はれぬ間は吾々とは無關係である。されば吾々の立場から、慈悲の無い智慧といふものは無いとも云へるわけである。此の無限の智慧を成就せしむるには、之に先つて種々の修行が積まれなければならぬ。其の修行が因となり、その報として佛身を成じたのである故に、之を呼んで報身佛といふのである。

此の佛身を成ずるといふのは、決して無よりして有を生ずることでは無い。たとへ如何程の修行を重ねやうとも、元來佛となるべき本性の具はらぬ者が佛となれやう筈が無い。されば佛は初めから實在するものと考へなければならぬ。斯く實在として觀たる佛身を呼んで法身といふのである。佛が佛として萬

古不變に實在する故に、報身として現はれることも、また應身として現はれることも出來るのである。但し佛が初めから佛であるならば、修行を積んで後に智慧を成ずるに及ばず、直ちに其の無限の智慧を現はしたら宜いではないか。諸佛の中でも釋迦牟尼佛は特に吾々に親しい佛であるが、（此事は後に至てなほ委しく說く）此の佛は發心から成道まで十年以上の修行を重ねて、はじめて佛となつたといふ。是れでは吾々が學問や技藝を習つて歲月を重ねて後はじめて熟達するのと同じことで、佛たるかひも無いやうに思はれるではないか。此の疑問は誰の心にも起り得るものであるが、更に深く之を考へて見ると此處に佛の貴い所以が存するのである。佛の世に出られたのは吾等衆生を導いて、佛のやうな貴い者にならせやう爲である。されば其の言說を以て吾々を敎へらるゝのみが說法ではない。其の身に示さるゝ所が盡く說法である。

所作の佛事未だ曾て暫くも廢せず。——壽量品

とあるは此意である。釋尊が修行を重ねて佛になつたのを見てこそ、吾々凡夫は初めて『吾もまた修行を怠るまい』といふ志を發すべきである。釋尊の發心から成道までの十二年は、『汝等もまた斯くせよ』と、身を以て吾々に示された敎へである。

吾々が法身として佛を觀るといふのは、吾々の心で佛といふ概念を作つたことでは無い。是れは佛の力が直接に吾々の心に働いて、吾々の心に印したる姿である。前にいふ如く、佛はまづ其の慈悲に於て吾々に現はれ、續いて其の智慧に於て吾々に現はれ、而して吾々は此の慈悲と智慧との畢竟一にして二ならぬことを知る。既に之を知る上は、其の慈悲、その智慧の根柢たる所のものが無ければならぬことに想ひ到らなければならぬ。斯くして吾々は法身佛を認むるに至るのである。法身は實在である。實在であれば固より空なる概念と異つて、活きたるもの、力あるものでなければならぬ。力があれば必ず現はれなけ

ればならぬ。其の現はれた所即ち智慧となり慈悲となるのである。されば報身、應身を離れたる法身は如何しても考へられぬ。三にして一なりともいふべく、一にして三なりともいふべき佛の限りなく貴い姿は、その教への中に久しく身を浸して、疑はず惑はぬものにして初めて之を明に觀得べきである。

斯る佛に比べては、吾等凡夫は譬へやうも無く卑しいものであるが、さりとて決して根本的に隔つたものなのでは無く、日蓮上人も『我等が己心の釋尊』と申された如く、佛となるべき性質は吾々の心にも初めから具はつて居るのである。佛たるべき性質が具はつて居るのであるから、智慧の種も慈悲の芽も共に存すること勿論である。之を自覺することが、凡ての善事善行の基礎となるべきものである。自己を罪惡の固まりと視て、たゞ仰いで神の救ひを求めようといふ如き主張から見ると、自己に佛性が具はつてゐるといふやうな思想は誇大の甚しきものであつて、斯る人は永く救はれぬものとも云はれやう。世俗の例

佛たるべき自覺

に就て考へても、自己の長所美點を認めて、心驕り、反省を忘り修養を缺くが爲に、それきり進歩せぬ者が決して少くない。しかし眞の自覺は斯樣なものでは無い。自ら佛性を具へてゐることに氣付くと共に、自己の今身に行ふ所、爲す所、言ふ所のことが餘りに佛性を具へたものには不似合であることを併せて自覺し、こゝに眞の發憤努力を生み出し來らねばならぬ。

三日月の頃よりまちてけふの月――ばせを

三日月の眉の如くに細い光は限り無く美しい。其の美しさを感ずればこそ、其の光が次第々々に增して、やがて滿月となる夜を待つ心も切なるわけである。待ち待つて後に仰ぐ故に、滿月の美しさめでたさも一入なのである。吾に佛性の具はれることを知つた人の悅びは、三日月の影を仰ぐ時のやうでなければならぬ。即ち其の悅びには大なる希望が伴つて居なければならぬ。月は遠く空にあるが、佛性は近くわが心にある。空にある月はたゞ宵毎に眺めてその光の盈つ

觀心の必要

るを俟つより外は無いが、吾が心にある佛性は吾自ら努力して其の光を盈たしむることに務めなければならぬ。

されば吾々が内に自ら顧みて、深く自己の心を觀ることより重要なものは無い。大なる悅びも、大なる望みも、深き慚愧も、不斷の努力も皆この中から生み出されるのである。斯の如き意味で、天台大師の創めた觀心の法は永久に大なる惠を吾々に遺すものである。而して其の中心を成す所の一念三千の說は法華經の敎を末世に弘むるために闕くべからざる津梁である。日蓮上人が

佛になる道は華嚴の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、眞言の五輪觀等も實には叶ふべしとも見えず。但天台の一念三千こそ佛になる道と見ゆれ。—開目鈔

といひ、若くはまた

常に口ずさみにすべき事は南無妙法蓮華經なり、心に存ずべき事は一念三千の觀法なり。——十章鈔

日蓮上人の立場

と申されたのに依ても、その重要なものであることは明であらう。而して此の天台の說をたゞ襲踏したのでなく、更に此の中から吾々が平生に於て、行住坐臥の間暫くも離るべからざる、最も切實なる敎を生み出された所に、日蓮上人の立場が別に存して居るのである。但しこれは天台の本意を離れて別に作つた立場では無い。天台の時と、日蓮上人の時とは像法と末法の相異がある故に、彼の時に於て未だ弘めなかつた究竟の道を、その時を得て世に弘められたのである。

總じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ。智者學匠の身と爲りても、地獄に墮ちて何の詮か有るべきや。所詮時々念々に南無妙法蓮華經と唱ふべし。——十八圓滿鈔

といふ如き斷言は、斯くして初めて出來得べきことである。

一念三千といふことは、法華經の文字の上に現はれては居らぬ。たゞ其の中

一念三千

の十如是の據り所とも見ゆる方便品の中に見えて居る。しかし方便品は迹門の中心を成すものであつて、一念三千の說は本門の根本精神に基いて立てたものである。卽ち法華經の言語文字に依らずして、其の言語文字の奥に秘められた精神を取つたのである。一念三千の說は十界を別つことから始まる。十界とは地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人界、天界、聲聞界、緣覺界、菩薩界、佛界である。此の十界の各が他の界の性質をも具へて居ることを『十界互具』といふ。十界互具である故に、卽ち百界となる。此の百界に各十如是が具はつて居る。十如是とは如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等である。百界に十如是が具はつて卽ち千如となる。此にまた各三世間が具はる。三世間とは五陰世間、衆生世間、國土世間である。之を千如に配して三千世間となる。此の三千世間が吾々の一念の中に含まれて居る故に、一念三千といふのである。此の一念の轉じやう次第で、此の身

を地獄に墮すことも出來れば、また此の身を佛界に置くことも出來る。

十界といふも十法界といふも同じもので、凡ての存在するものを悉く『法』といふのである。此の十界中で地獄界より天界までを六凡と稱し、聲聞界より佛界までを四聖といふ。前者は吾より外の事物によつて動され、境遇によつて左右される者で、後者は斯る繫縛を離れた者である。四聖中でも獨り佛のみが眞の悟りに達した者で、他はまだ迷ひを脫し切つた者では無い。故に迷悟によつて分てば、佛界を除いての九界は皆迷の中である。而して人は此の九界の中央に在る。此の十界とは如何なる性質のものであるかといふに、

一、地獄界は四界中の最下である。瞋恚の心の極點に達せるものが、卽ち此界である。

二、餓鬼界は貪欲の心の極點に達せるものゝ界である。如何に多く得ても足れりといふこと無く、常に餓ゑたる心で居るのである。

三、畜生界は愚痴の心の至極したるものである。愚痴の極に在る者は自らその愚痴なるを知らず、更に慚愧の心をもたぬ者である。

四、脩羅界は諂曲の心の至極したるものである。諂曲とは私心によつて正邪を曲ぐるのである、故に爭ひの絶え間は無い。しかし前の貪瞋癡の如き極惡のものとは同等で無い。

五、人界は平和を心とするものである。平和とは善ともなり惡ともなる、中間のものをいふので、向上すれば菩薩ともなり、向下すれば地獄にも墮つるのである。

六、天界は喜樂を心とするものである。一點の邪念無き故に、いつも喜樂の心を持ち得るのである。しかし邪念が無いといふだけで、萬有の實相に就て全く知る所が無いものは、六凡の中を脫することは出來ぬ。

七、聲聞界は佛の敎に入る者の中の最下位である。敎を聞いて世の無常を觀じ、道に入るの心を起した者である。

八、緣覺とは緣によりて覺るの義である。飛花落葉を觀て自ら無常を知り、佛道を求めた者である。此の聲聞と緣覺とを併せ稱して二乘といふ。何れも無常を觀ずることが主となつて居る。

九、菩薩とは菩提薩埵の略である。菩提とは覺の義で、薩埵とは有情の義。有情とは卽ち吾等衆生のことをいふので、覺有情といへば覺れる衆生である。但し此の覺といふは前の二乘のやうに獨り無常を觀じたのと異り、自ら覺ると共に他を覺らしむることを努むるので、卽ち絶大なる慈愛の心が具はつてゐるのである。此の慈愛の心無くして佛になることは出來ぬ。

十、佛とは佛陀の略である。譯して覺者といふが、此の覺は自覺と覺他と共に具はるのみならず、覺行圓滿にして無量無限の利益を凡ての者に與へるのである。

以上の十界は皆それ〴〵の特色を有するのであるが、而も全く相隔たるものでは無く、何れの界に在る者でも、他の界に入るべき凡ての性質を具有して居るのである。地獄や餓鬼に佛性がある、菩薩にも餓鬼や地獄の性がある。斯く十界の各が皆他の界の性質を具ふるを名けて『十界互具』といふのである。若し十界が全く相隔るものであつたら、一たび惡道に入る者は永久に之を脱することは出來ぬであらう。たとへ如何に貴い敎へが與へられやうとも、佛になる種が全く無い者に與へられた敎へは、譬へば水中に火を投ずるやうなもので皆消えてしまはなければならぬ。然るに地獄、餓鬼、畜生（これを三惡道といふが）の如き境界に在る者にも佛性が具はるといふは如何にも有難いことである。以上十界が互具なるに依り卽ち百界となる。此の百界に各十如が具はるのである。

十如とは十如是の略である。如是とは正しく是の如くであつて決して異はぬ、如何なる場合に於ても誤りは無いといふ意である。經の始めに『如是我聞』とあるその如是も同意である。十如是とは如何なるものかといふに、

一、如是相といふは外に現はれたる形相である。物は皆その固有の相ある故に、外より見て之を別つことが出來る。

二、如是性とは其物に具はつたる性質である。性異るが故に其の現はるゝ所の相が異るのである。

三、如是體とは其物の本體である。體には必ず性が具はり、性は必ず相として現はれる。されば相性體の三は決して離るべからざるものである。

四、如是力といふは、その物に具はる力である。既に一の物があれば之に何等かの力の具はらぬといふ筈は無い。

五、如是作といふは、その力によつて生ずる作用である。斯くしてその力が外に及ぶのである。

六、如是因といふは、此の力作によりて或る働きを起し、それが外に何等か

の變化を生ずべき原因を爲すことである。

七、如是緣といふは助因である。卽ち此の因を助けて或る結果を來さしむる種々の緣由である。

八、如是果とは、卽ち因緣によりて必然に生じたる結果である。

九、如是報といふは、此の果が事實の上に現はれたる結局の處である。譬へばマッチの有るのが因であれば、之を摺るのは緣で、火を發したのは果である。此の火で物を燒き盡したるは報である。

十、如是本末究竟等とは以上の九如是に通じていふのである。相より報に至るまでの九如是が整然として具はり、よく統一せられて居る有樣を呼んで本末究竟等といふのである。

されば此の十如是は凡ての物の存在する爲の根本的條件で、此等の條件を具へずには一物たりとも存在するを得ぬのである。此の十如が百界に具はる故に千如となる。更に之に三世間が具はる。

世間といふ意は、過去現在未來に遷流するを世といひ、彼此間隔するを間といふ。三世間といふは、

一、五陰世間、また五蘊ともいふ、卽ち色受想行識の五である、色とは凡て有形の物をいふので、之に對して心に生ずる感じが卽ち受である。既に感じが生ずれば續いて種々の想像が起る。之に續いて善惡種々の思想が起る、これを行といふ。識とは其の凡てを了別識知する心の體をいふのである。十界の各は各異りたる五蘊を具ふる故に五蘊世間といふのである。

二、衆生世間、五蘊の働きが集まつて一の個體となる、それが卽ち衆生である。十界の衆生皆それ〴〵に異る故に衆生世間といふ。

三、國土世間、衆生集まつて國土を成す。その國土の各相異るに依て、之を國土世間と稱するのである。國土を成す各衆生の間に統一あり、衆生を成す五

蘊の間にも統一あり、三世間整然として存在する。

斯る三世間を千如に配して、三千世間といふのである。廣くいへば三千世間であるが、吾々の此の一念中に斯る三千世間が宛然として存する故に、一念三千といふのである。而して斯る細微の關係が一絲も亂れず、千萬古を通じて存することを深く考へて見ると、此處に極めて神聖なる、また極めて深遠なる意義を認めざるを得ぬことになる。斯く考へて見ると日蓮上人が、

初に如是相とは我身の色形に顯はれたる相をいふ也。是を應身如來とも、又は解脱とも、又は假諦とも云ふ也。次に如是性とは我が心性を云ふ也。是を報身如來とも、又は般若とも、又は空諦とも云ふ也。三に如是體とは我が此身體なり。是を法身如來とも、又は中道とも、法性とも、寂滅とも云ふ也。

されば此の三如是を三身如來とは云ふ也。此の三如是が三身如來にておはしましけるを、よそに思ひ隔てつるが、はや我身の上にてありける也。かく知りぬるを法華經をさとれる人とは申す也。此の三如是を本として是より殘りの七の如是はいでて、十如是とは成りたる也。此の十如是が百界にも千如にも三千世間にも成りたる也。——十如是事

と申されたのが誠に意味深く感ぜられる。三千の世間が偶然に存するので無くこゝに或る統一の存することを認むる上は、更に進んで其の統一の存する理由を究めなければならぬ事になる。之を究めて、畢竟一の偉大なる力が現はれて三千世間となつたのであると知つた時、その整然たる統一を具ふる理が初めて明になるべきである。

尚ほ吾々の觀察の版圖を擴げて、吾々の周圍の凡ての物に及ぶ時には、獨り吾々の心に或る偉大なる力の現はれてゐるのみならず、天地間の有らゆる物の間に、同じ秩序が存し、同じ統一の行はれて居ることに思ひ到るべきである。

即ち日蓮上人が、

「百界千如一念三千は非情の上の色心の二法、十如是是れなり。……草木の上に色心の因果を置かずんば、木畫の像を本尊に恃み奉ること無益なり。……止觀第五に云く、國土世間亦た十種の法を具す、所以に惡國土相性體力等云々。釋籤第六に云く、相は唯だ色に在り、性は唯た心に在り。體力作緣は義色心を兼ぬ。因は唯だ心、報は唯だ色に在り等云々。金錍論に云く。乃ち是れ一草一木一礫一塵、各一佛性、各一因果あり、緣了を具足す等云々。――觀心本尊鈔

と示された如く、草にも木にも石にも沙にも、深く之を觀れば不思議の力の宿つて居ることを認めなければならぬのである。吾々が活きて居るのみならず、天地萬物皆活きて居る。吾々に心があるのみで無く、天地萬有には皆心があるのである。されば又吾々の一念に三千世間が具足するのみならず、有らゆる物に三千世間が具足するといふことも考へられる。また吾々が成佛し得る如く、凡ての物が皆成佛し得ることも考へられるのである。

斯の如く吾と吾が周圍の事物とは、統一を有し調和を具へて存在するのである。之を放てば宇宙の全體に亙り、之を收むれば一念の中に歸する、此の微妙なる働きは、或る偉大なる力の現はれたものでなければならぬ。此の力とは何ぞ、卽ち壽量品に示されたる『秘密神通之力』である。吾と吾を圍める天地萬有とが、斯の如くに存在し、斯の如くに變化し、斯の如くに活動するは、悉く此の力の現はれたものに外ならぬのである。十方世界に出られた多くの佛は皆不思議の力を具へ、皆無量の慈悲を具へ、皆洪大なる利益を與へられたものであるが、その力といふも、その慈悲といふも、また其の利益といふも畢竟するに彼の『秘密神通之力』の現はれた諸方面たるに過ぎぬものである。斯の力を具へられたる者は、唯一絕對の佛、卽ち本佛である。本佛なければ何者も無い、何の力も無く、何の物も無く、何の事も無い。吾々は之を知ることに依て吾々の存在の意義を知り、吾々の存在の目的を知り得べきである。卽ち自ら『吾は何

であるか』を知ると共に、『吾はいかにすべきか』を知り得べきである。

2、本門の本尊

唯一絶對の佛

唯一絶對なる本佛を認むる時、吾々は初めて吾々の身心を擧げて之に歸依することが出來る。斯くて吾々は此の有限の世界に住みながらも、常に絶對の靈力に惹かれて居るが爲に、心に大なる滿足を感じ、また大なる勇氣を蓄へ得べきである。吾々の爲に斯る貴い道を指示されたる釋尊である故に、

世尊は大恩まします、希有の事を以て憐愍教化して、我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。――信解品

と摩訶迦葉等も感謝したのである。

諸教と佛教

但し唯一絶對なる者を認むることは獨り佛教に限らぬ。自然科學者のいふ『エネルギー』でも、相對的のものでは無い。哲學者が本體といひ、絶對といひ、實在といふは皆或る唯一のものを捉へていふので、凡ての現象、凡ての活動、凡ての變化は皆其の力の發現したものであると認むるのである。しかし哲學は主として理智の働きによつて成立つものである故に、その所謂本體、所謂實在は佛教でいふ所の本佛と大に趣を異にして居る。勿論その本體とか、實在とかいふものと本佛とが別のものであらう筈は無い。人は人として根本的に同じ性質、同じ働きをもつて居る。人が誠實に、熱心に究め究めて後に捉へ得た所のものが、幻影や空想であらう筈は無い。何れも唯一絶對なる本佛を仰ぎ得た者たることは疑を容れぬ。たゞ理智の働きのみを以て之を求むる時は、その理智の働きに應ずる丈の部分が之に現はれるから、之を本佛として仰がずに、本體として見るとか實在として見るとかいふことになる。卽ち本佛の具有せらるゝ秘密神通の力の或る部分だけを認めて、これを本體とも、實在とも、乃至エネルギーとも名けたものと斷じて宜い。儒教に於て天といひ、耶蘇教やマホメット教に於て神といふも、又決して僞りに作つたものでも無く、誤つて認めた幻

本佛の慈悲

影でも無く、確かに本佛の一面を仰ぎ視たものである。本佛を一の圓に譬へれば、之を本體といふも一の弧である、之を實在といふも一の弧である、天といふも神といふも一の弧である。しかし何れも圓の全體では無い。其の圓の全體は釋尊によつて吾々に指示された。吾々は自ら身命を惜まざるの覺悟を以て、一心に之を見奉らうと努むれば。明に之を見得るに至るべきである。

單に理智の働きのみを以て窺ひ得た所では、天地萬有の存在する根本の原理とか、萬有の間に存する凡ての法則の淵源とかいふに過ぎぬが、最も深い信仰の力によつて窺ひ得た所によると、本佛の具有せらるゝ慈悲の力は洪大無邊である。此の大慈悲を認め得たものは、卽ち自ら此の大慈悲の中に包まれて居ることを感じ、斯くして漸く自己の具有する佛性を開發し、漸く成佛の端を開き得るのである。卽ち日蓮上人が、

卽身成佛と開覺するを如來秘密神通之力と云ふなり。成佛するより外の神通

と秘密とは之れ無き也。――御義口傳

と敎へられたる所以である。

されば吾々は此の本佛に對してこそ、初めて絕對の信仰を捧ぐべきである。諸の佛神に對する信仰は、此の一の信仰の中に含まれてしまふべきものである。無限の遠い昔から十方の世界に多くの佛が出て、敎を與へ益を施したが、それは皆本佛の具有せらるゝ大慈悲の現はれたものに外ならぬ。而して之を大觀すれば、此等諸佛の出現は釋迦牟尼佛の出現の前驅を爲すものといふべきである。(前に擧げた法華經の梗概に於て、此の事は明に分る筈である。)されば諸佛の出世は、本佛が一切衆生を導かるゝための貴い方便であるといふも誤りでは無い。斯くて後に本佛は、釋迦牟尼佛として吾々の娑婆世界に現はれたまひ、四十餘年の說法の後に、自ら其の壽量の無限なることを明し、吾々の歸依すべき目標を指示されたのである。故に吾々は吾々の眼前に人の姿を取つて現はれ給

妙法五字

うた釋迦牟尼佛を通じて、本佛の絶大なる慈悲を仰ぐことが出來るので、『南無本佛』といふも、『南無釋迦牟尼佛』といふも、語は異るとも意は一つになる。

然るに日蓮上人の親ら認められた本尊には、中央に南無妙法蓮華經とあつて、本佛とは無い。又釋迦牟尼佛は其の片脇に記されてある。（卷頭に出した親筆の本尊を參照せられたい）是れには何等かの深い意義がなければならぬ。

本門の本尊、妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に廣宣流布せしめん。――顯佛未來記

とある上に、また

無作三身の寶號を南無妙法蓮華經と云ふ。――御義口傳

とも云つてある。三身とは前に云つた法身、報身、應身の三である。無作とは何等の作爲なしに本來具はつて居ることである。三身の功德を本來一身に具へられたる本佛を、妙法蓮華經の名を以て呼ぶといふのである。勿論これは經典の名であらう筈は無い、經典の名を以て其の中に含まれたる根本精神を現はすものである。其の法といふは天台大師が『十界權實の法』と釋した如く、有形無形を問はず、凡て存在するものを盡く含めていふのである。此の凡ての物は盡く本佛の力の現はれたものである故に、十界の盡くが渾然として缺けず紊れず、之を形容して『妙』といふより外に、適當なる語は無い。されば妙法といへば『本佛と其の力の現はれたるもの』といふ意になる。蓮華は其の妙なるさまを形容するものである。此の五字の中に十界が盡く包容せられ、統治せられて居るのである。

十界勸請の曼荼羅

日蓮上人が建長五年の四月二十八日、安房の淸澄山で題目を唱へ初められた時に、上人の胸中には本尊の姿が明に思ひ浮べられてあつたに違ひ無い。しかし上人は直ちに之を現はさず、その後身を以て法華經の中の豫言を試み、刀杖瓦石といひ、數々見擯出といひ、凡そ法華經の行者に加はるべき迫害の凡てが御一身に加はつたるに依て、愈々末法の世に此經の弘まるべきこと疑ひ無しと

見究められ、佐渡の配所に於て初めて本尊を圖せられた。卽ち文永十年四月二十五日には觀心本尊鈔が成り、同じ年の七月八日に至て所謂十界勸請の大曼荼羅を圖顯せられたのである。

其の本尊の體たらく、本師の娑婆の上に寶塔空に居し、塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛、多寶佛。釋尊の脇士、上行等の四菩薩、文殊彌勒等の四菩薩は眷屬として末座に居し、迹化他方の大小の諸菩薩は、萬民の大地に處して雲閣月卿を見るが如し。十方の諸佛は大地の上に處したまふ、迹佛迹土を表する故なり。――觀心本尊鈔

といふのが其の大體の形で、南無妙法蓮華經の七字を中心として、之を繞つて十界を代表すべきものが凡て書き列ねられてあるのである。

元來曼荼羅といふものは日蓮上人に始まつたのでは無く、極めて舊い時代からあるものであるが、十界を具足して、しかもそれが妙法蓮華經に依て統一せ

られた曼荼羅といふは、全く日蓮上人の獨創に成るものである。曼荼羅とは梵語であつて、壇といふのが其の正しい譯である。卽ち佛菩薩等の集り居る所の壇である。之を『諸佛聚』或は『功德聚』といふは義によつて譯したものである。此の卷頭に揭げた本尊に就て見れば、十界勸請の曼荼羅の如何なるものかは明であらう。中央の南無妙法蓮華經の七字は本佛と其の具へらるゝ力とを現はすものである。此の力の現はるゝ所卽ち十界となり、十界は本佛によつて統一せられてゐる。されば七字を繞つて書き列ねられた所には、釋迦多寶の佛あり、上行無邊行等の菩薩あり、舍利弗迦葉等の二乘あり、日月等の諸天あり、人界には阿闍世王あり、阿脩羅あり、龍女は畜生を代表し、羅刹女鬼子母神等は鬼を代表し、提婆達多は地獄を代表する。斯く十界の代表者が具はつてゐるのみならず、それが妙法蓮華經の光に照されて、何れも成佛し得べき約束をもつて居ることが現はれて居るのである。尙ほ四天王、不動愛染等は此の妙法の弘ま

るべき國土を守護するもの卽ち『外護』として書き現はされ、龍樹、天親、天台、傳敎の四師は釋尊より法華經を傳へた正脈である故に、卽ち之を『傳燈』として書き現はしてある。而して日蓮上人自身は此の四師より傳はつたる敎への本意を發揮し、永く末世の衆生の導師たるべき者として、自ら其の名を署せられてある。又特に此の經が日本國を流布の中心として世界に及ぶべき意義を明にする爲に、天照太神と八幡大菩薩との御名が記されてある。天照太神によつて神代が代表せられ、八幡大菩薩によつて人皇の代が代表せらるゝのである。

本尊に對ふ時、吾々は本佛が不滅に在すこと、其の常住の說法は今も、今より後も永く續けられて居ることを、正しく形の上に看取することが出來る。前にも記した如く、法華經の壽量品に於て、佛の入滅は方便であることが明に示されてある。而して

衆生既に信伏し、質直にして心柔輭に、一心に佛を見奉らんと欲して自ら身命

曼荼羅の根據

己心の實寫

を惜まず。時に我及び衆僧俱に靈鷲山に出づ。我時に衆生に語る、常に此に在て滅せず、方便力を以ての故に、滅不滅ありと現ず。

とあつて、何人でも身命を惜まぬ程の熱烈なる信仰のある者の前には、佛が必ず現はれたまふべきことを約束されてあるのである。勿論『現はれたまふ』と云つても、別の所から現はれ來るのでは無い。佛は固より常住なのを、吾々が見得なかつた。それが見えて來るのである。佛が見えて來れば十界の實相もまた次第に見えて來べきである。其の有樣が一紙の曼荼羅上に明に圖し現はされて居るのである。

而も前にいふ如く、十界は吾が心の中に在る故に、吾は此の曼荼羅に向ふ時宛も明鏡に向ふが如く、吾が心中が有の儘にこゝに寫し出されてあることを感ずべきである。上は釋迦多寶の二佛によつて代表せられた佛界から、下は提婆達多によつて代表せられた地獄界までが、盡く此の己心中に存するのである。

十界と本佛

而して人界を代表するものとして阿闍世王の名が記されてあるのは、殊に趣深く感ぜられる。阿闍世王は提婆達多の邪說に惑はされて父頻婆沙羅王を幽閉し釋尊に對して多くの迫害を與へ、罪の限りを盡したのであるが、後に釋尊の慈悲によつて感化せられ、佛道に入るを得たのである。人は固より、たとへ地獄界の者と雖も佛種を具へてゐる故に、佛の大慈悲の日の光りが之に加はれば、その種は必ず成長し發育する。されば法華經に於ては餘經に於て『永不成佛』と定められた二乘の成佛を許してある。その上に龍女の成佛をも許してある。なほ其上に地獄に墮ちたる提婆達多の成佛をさへも許してある。此の貴い意義は此の一紙の曼荼羅の上にも明に現はれてゐる。

首題の五字中央にかゝり、四大天王は寶塔の四方に座し、釋迦多寶本化の四菩薩肩を竝べ普賢文殊等、舍利弗目連等座を屈し、日天月天第六天の魔王、龍王阿脩羅其外不動愛染は南北の二方に陳を取り、惡逆の達多愚痴の龍女一

座をはり、三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等、加之日本國の守護神たる天照太神八幡大菩薩、天神七代地神五代の神々總じて大小の神祇等、體の神連る、其餘の用の神豈もるべきや。寶塔品に云く、諸の大衆を接して皆虛空に在く云々。此等の佛菩薩大聖等、總じて序品列座の二界八番の雜衆等一人も漏れず此御本尊の中に住し給ひ、妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる。是を本尊とは申すなり。——日女御前御返事

とあるに依て、此意はまことに明である。されば吾々の信仰の本尊たるものは妙法蓮華經の五字に外ならぬ。而して此は吾々の絕對に歸依すべきものなる故に南無の二字を以て之に冠する。又十界の凡ての者は此の妙法の中に漏れず。此の妙法の光に照されて皆成佛し得べきものである故に、之を五字の左右に列ね記して、その意を現はしたものである。

諸佛の師とする所は所謂法なり。——涅槃經

種々の圖式

といひ、若くは

此の大乘經典は諸佛の寶藏なり、十方三世の諸佛の眼目なり、三世の諸の如來を出生する種なり。――觀普賢經

といふ如き語もあつて、妙法の絶對的に貴いことは明白であるが、此の妙法は卽ち本佛の力の現はれたものである。而も之を呼ぶに佛を以てせずして法を以てするは、其の本體とその具有する力とを併せ示さんが爲である。

此の曼荼羅の圖式に就ては古來から種々の說があつて、頗る面倒なものであるが、要するに『十界が妙法五字の光明に照されて本有の尊形となる』といふ意を正しく顯はしたものに過ぎぬのである。日蓮上人の親筆に成る曼荼羅の中にも、形式は種々あつて、其の列記せられた佛菩薩以下諸尊の數は決して一定せぬ。その或るものを廣式といひ、或るものを略式といひ、其の廣式のものゝ中にも、法華經の文を記されたのが、（例へば『此經則閻浮提人病之良藥云々』

題目の意義

といふ如くに）多くある。又人界を代表するものとして轉輪聖王と阿闍世王とを記したのも多い。此の場合では人間の正見と邪見とを二者によつて現はすことになつて居る。その外異同をいへば種々あるが、要をいへば前に引いた觀心本尊鈔と、日女御前御返事に記された所に盡きて居る。此の本尊に對する時、吾吾は初めて『吾は何であるか』を知り、また『吾は何の爲に存するか』を知り得べきである。

3、本門の題目

本門の本尊に對して『南無妙法蓮華經』と唱へるが卽ち本門の題目である。題目といへば其の經典の名であるから、阿彌陀經といふも大日經といふも題目である、論語といふも詩經書經といふも亦題目である、しかし此處にいふ題目は、其の名に於ては題目であるが、其の意に於ては單に『經の名』といふことより以上に奧深い意義を含んでゐることは勿論である。今吾々は釋尊が靈鷲山に

於て說かれたといふ妙法蓮華經を讀むのであるが、此の經の中には遠い昔から幾度も種々の佛によつて法華經が說かれたことを記してある。

是時に日月燈明佛、三昧より起て、妙光菩薩に因せて大乘經の妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くるを說きたまふ。——序品

爾時に彼の佛（大通智勝如來のこと）沙彌の請を受て、二萬劫を過ぎ已て、乃ち四衆の中に於て是の大乘經の妙法蓮華教菩薩法佛所護念と名くるを說きたまふ——化城諭品

時に仙人有り、來て王に白して言さく、我大乘を有てり、妙法蓮華經と名け奉る。若し我に違はずんば、當に爲に宣說すべし。——提婆品

とある如き、その一二の例である。而して多寶如來の誓ひといふのにも、

若し我成佛して、滅度の後、十方の國土に於て法華經を說く處有らば、我の塔廟是の經を聽かんが爲の故に其前に涌現して爲に證明と作り、讃めて善哉と言はん。——寶塔品

とある。されば法華經が幾度も說かれたことは明である。而して之を

十方佛土の中には唯だ一乘の法のみ有り、二も無く亦た三も無し。——方便品

とあるに照して見ると、佛の眞實の意を示したものが卽ち法華經であるといふことは自ら明になる。勿論無限の昔から十方の世界に出現した佛の數は夥しいものであらうが、此等諸佛の出現の目的は同一である。此等諸佛はいづれも本佛の種々な姿を取つて現はれたものに過ぎぬのである、されば其の敎へた所に若し異ひがあれば、それは方便としての異ひであるので、

諸の衆生の種々の欲、深心の所著有ることを知て、其の本性に隨て種々の因緣、譬諭言辭、方便力を以ての故に而も爲に法を說く。此の如きは皆一佛乘の一切種智を得せしめんが爲の故なり。——方便品

といふのは、諸佛に通じての言である。

諸佛は唯だ一大事の因緣を以ての故に世に出現したまふ。——方便品

とある以上は、諸佛の說かれた法華經が、いづれも同じものであることは疑ふべき所が無い。

夫れ法華經と申すは八萬法藏の肝心、十二部經の骨髓なり。三世の諸佛は此經を師として正覺を成じ、十方の佛陀は一乘を眼目として衆生を引導し給ふ。

——兄弟鈔

とある如く、凡ての佛の敎へられた所は法華經に歸着する。又その凡ての佛が悟りを開かれたのは、法華經を得たに過ぎぬのである。之を要するに諸佛が自ら努力を積んで法華經を得、その得たる所の法華經を以て衆生を導かれたのである。其の法華經の何物なるかを吾々に明されたのが、今の二十八品に分れ六萬九千餘字で記された法華經なのである。

此經一部八卷、二十八品、六萬九千三百八十四字、一々に皆妙の一字を備て、

三十二相八十種好の佛陀なり。——開目鈔

と記されたは之が爲である。卽ち『南無妙法蓮華經』といふは經をいふので無く、經の內容をいふのである。經の內容は卽ち『諸法實相』で、此の諸法實相は卽ち『如來秘密神通之力』の現はれたものに外ならぬ。されば『妙法蓮華經』といふ中に凡ての佛の凡ての敎へが包容せられ、統一せられて居る。吾々が之に對して『南無』といふ時、凡ての佛を崇敬し讃嘆し感謝する意が此中に含まれて居るのである。

但し吾々が本尊に對するのは、之を崇め敬ふといふだけの意味では無く、之に『南無』するのである、卽ち之に『歸命』するのである。吾が身心の盡くを之に托するのである。而してその結果としては、

釋尊の因行果德の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を讓り與へたまふ。——觀心本尊鈔

六卽位

とあるやうに、吾々の心に佛の力が宿つて、次第に佛に近づくやうになり得るのである。方便品にも『我本と誓願を立て、一切の衆をして我が如く等しくして異ること無からしめんと欲しき』とあつて、釋尊と同じやうな智慧を成じ、釋尊と同じやうな功德を具へ得るまで進み得るのである。而して之が爲には信の一字を所詮とするのである。

信の一字を詮と爲す。不信は一闡提謗法の因、信は慧の因、名字卽の位なり。

――四信五品鈔

とも示されてある。此の『名字卽』といふは天台大師が立てた『六卽』の一である。これは凡夫が佛になるまでを六つの階段に分つので、その最初が理卽、その第二が名字卽である。凡夫も佛性を具へてゐるから、佛になれる道理である。しかし『佛になれる』といふ理だけで、修行を積まなければ佛になるべき運びは一更につかぬ。これ卽ち最初の理卽である。若しこゝに氣付いて、佛法の何者なるかを學ぶ心になり、之を聞きて始めて信を起せば、そこが名字卽である。其名を聞いて信ずるだけで、まだ實行の段まで行かぬから名字卽といふのである。

されば成佛といふまでには、まだ前途甚だ遼遠ではあるが、苟くも信といふ一途に入れば其の旅程に第一歩を運んだものであるから、成佛といふ『果』に對して、その『因』を捉へ得たものといふべきである。法華經の迹門にも本門にも十妙を具すといふことが天台大師の『法華玄義』の中に說かれてある。本門の十妙とは、本因、本果、本國土、本感應、本神通、本說法、本眷屬、本涅槃、本壽命、本利益の十妙をいふのである。此は皆法華經の中に具はつた不可思議な性質であるが、此の中で殊に重要なものは本因、本果、本國土の三妙である。因とは佛になるべき原因の修行で、果とは佛になつた結果である。國土とは佛の敎化を施す場所である。法華經の壽量品に、

我本と菩薩の道を行じて成せし所の壽命、今猶ほ未だ盡きず。

本因、本果、本國土

とあるは本因妙を示すものである。

我成佛してより已來、甚だ大に久遠なり。

とあるは本果妙を示すものである。而して

是より來、我常に此の娑婆世界に在て說法敎化す。

とあるは本國土妙を示すものである。此の本果妙に基いて本門の本尊が定められる。此の本因妙に基いて本門の題目が敎へられる。此の本國土妙に基いて本門の戒壇が立てられる。此の娑婆世界に於て、吾々が共に菩薩の道を行じ、共に皆成佛を得れば、それで諸佛出世の目的が完全に達せられ本佛の秘密神通之力が完全に證せられる。本尊には其の結果を示してあるから、吾々は斯る結果に到達すべく、其の原因を作らなければならぬ。これ卽ち題目を唱へるといふことの必要を生ずるわけである。而して此の『菩薩の道』といふ中に、自利と利他との兩方を含むことは、前に既に述べた通りである。

此の本因本果といふは一念三千なり。本有の因、本有の果なり、今始めたる因果に非るなり。五百塵點の法門とは此事を說かれたり。因と云ふは信心領納の事なり。此經を持ち奉る時を本因とす。其の本因のまゝ成佛ありと云ふを本果と云ふなり。日蓮が弟子檀那の肝要は本果より本因とするなり。本因なくしては本果有るべからず。——日向記

といふは卽ち題目の重要なる意義を說き示されたるものである。勿論信心といふは、吾が心に佛性の具はつたることを自覺しての上でなければならぬ故に、是を信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば、法華經を覺りて如法に一部をよみ奉るにてあるなり。——十如是事

とも說かれてある。自己に佛性がある如く、他人にもある。自己の佛になるを願ふと共に、他人の共に佛になることをも願はなければならぬ。

末法に入て今日蓮が唱ふる所の題目は前代に異なり、自行化他に亙りて南無